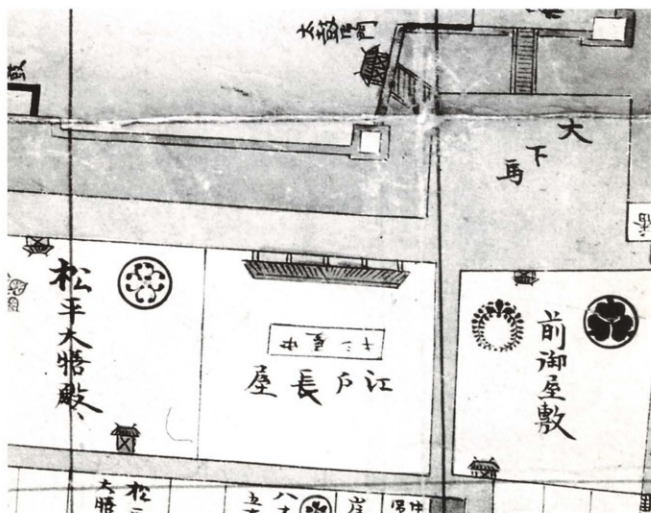


高松海岸線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1冊

高松城跡(江戸長屋跡Ⅰ)



2008年3月

高松市教育委員会

例 言

1. 本書は高松海岸線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第1冊で、高松市丸の内に所在する高松城跡(江戸長屋跡1)の調査報告を収録した。
2. 発掘調査及び整理作業については高松市教育委員会が実施した。
3. 調査から報告書作成に至るまで、下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意としたい。
香川県教育委員会、四国通商株式会社、片桐孝浩(香川県教育委員会)、松本和彦(香川県歴史博物館)(敬称略)
4. 高松城跡(江戸長屋跡1)の調査は、文化振興課文化財専門員小川賢・渡邊誠が行った。
5. 以下の業務については、委託業務として行った。
基準点打設：株式会社イピンク
遺物保存処理：株式会社吉田生物研究所
遺物写真撮影：西大寺フォト(図版15-1を除く)
6. 本書の執筆は第3章第3節と第4章第1節を渡邊が行い、それ以外は編集と合わせて小川が行った。
7. 本文の挿図として、国土地理院発行地形図5万分の1「高松」及び高松市都市計画図2千5百分の1「高松市街北部」を一部改変して使用した。
8. 発掘調査で得られた資料は、高松市教育委員会で保管している。
9. 本報告書の高度値は海拔高を表し、方位は座標北(世界側地系)を表す。
10. 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SA：櫓列状遺構 SD：溝状遺構 SK：土坑 SP：柱穴 SX：性格不明遺構
11. 土壌及び土器観察の色調表現は、新版 標準土色帖(農林水産省技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色表監修)に拠る。

目 次

	第1章 調査の経緯と経過	
第1節	調査の経緯	1
第2節	調査の経過	1
	第2章 地理的・歴史的環境	
第1節	地理的環境	2
第2節	歴史的環境	2
	第3章 調査の成果	
第1節	調査方法	4
第2節	主要遺構と基本層序	4
第3節	第2遺構面の遺構・遺物	8
第4節	第1遺構面の遺構・遺物	17
	第4章 まとめ	
第1節	中世以前について	38
第2節	近世以降について	38

挿 図 目 次

- 第1図 調査位置図 (1/5,000)
 第2図 遺跡位置図 (1/50,000)
 第3図 高松城跡周辺地勢調査位置図 (1/10,000)
 第4図 第2遺構面遺構配置図 (1/80)
 第5図 第1遺構面遺構配置図 (1/80)
 第6図 調査地点層序図 (高さ: 1/40, 幅: 1/80)
 第7図 SE201 平・断面図 (1/40)
 第8図 SE201 出土遺物実測図 (1/3)
 第9図 SD201 平・断面図 (1/40・1/80)・出土遺物実測図 (1/3)
 第10図 SD201 出土遺物実測図 (1/3)・SD202・SK210 平・断面図 (1/40)・出土遺物実測図 (1/3)
 第11図 SK202・203・208・209・215 平・断面図 (1/40)・出土遺物実測図 (1/3)
 第12図 SP203・224・229・231・253 平・断面図 (1/40)・出土遺物実測図 (1/3)
 第13図 第2遺構面下層検出平面図 (1/80)・掘削時出土遺物実測図 (1/3)
 第14図 SK213・214 平・断面図 (1/40)・出土遺物実測図 (1/3)
 第15図 第2遺構面遺構検出時出土遺物実測図 (1/3)
 第16図 SA101 平・断面図 (1/80)
 第17図 SE102 平・断面図 (1/40)・出土遺物実測図 (1/3)・SE102 検出時出土遺物実測図 (1/3, 1/4)
 第18図 SE101 平・断面図 (1/40)
 第19図 SE101 出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)
 第20図 SK101 平・断面図 (1/40)・出土遺物実測図 (1/3)
 第21図 SK102・105・106・108 平・断面図 (1/40)・出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)
 第22図 SK104 平・断面図 (1/40)・出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)
 第23図 SK114・115・116・119 平・断面図 (1/40)・出土遺物実測図 (1/3)
 第24図 SK120・122・126 平・断面図 (1/40)・出土遺物実測図 (1/3, 1/2)
 第25図 SK112・118 平・断面図 (1/40)・SK112 出土遺物実測図 (1/3)
 第26図 SK112 出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)
 第27図 SK112・118 出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)
 第28図 SK125 平・断面図 (1/40)・出土遺物実測図 (1/3)
 第29図 SK125 出土遺物実測図 (1/2)
 第30図 SK113 平・断面図 (1/40)・出土遺物実測図 (1/3, 1/2)
 第31図 SP105・102 出土遺物実測図 (1/3)
 第32図 SX101 平・断面図 (1/40)・出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)
 第33図 SX103 平・断面図 (1/40)・出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)
 第34図 SX102 平・断面図 (1/40)・出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

写 真 図 版 目 次

- 図版1 4 SE201 (南から) 7 SK106 断面 図版12 1 SK113 出土土器・陶磁器・鉄釘 2 SK125 出土陶磁器
 第1遺構面全景 (南から) 5 SK204 断面 8 SK108 断面 1 SK113 出土土器・陶磁器・鉄釘
 第2遺構面全景 (北から) 6 SK213 (西から) 図版8 1 SK112 断面 2 SK125 出土陶磁器
 図版2 7 SK213 遺物出土状況 2 SK113 断面 図版13 1 SK101 出土土器・陶磁器
 1 調査地西壁土層 (南東から) 図版5 3 SK114 断面 2 SK125 出土陶磁器
 2 調査地南壁土層 (北から) 1 第1遺構面北部 (南西から) 4 SK115 断面 1 SK101 出土土器・陶磁器
 3 調査地北壁土層 (南から) 2 第1遺構面南部 (西から) 5 SK116 断面 2 SX101 出土遺物
 4 SX101 断面 3 SX101-SE102-SK125 (西から) 6 SK118 断面 3 SX102 出土陶磁器
 5 SA101 P-2 (東から) 図版6 7 SK119 断面 4 SX103 出土遺物
 6 SA101 P-3 (東から) 1 第1遺構面 (南から) 図版14 1 SE102 検出時出土遺物
 7 SA101 P-4 (東から) 2 SA101 (北から) 8 SK122 断面 2 SE101 出土土器・刻書土器
 8 SA101 P-5 (東から) 3 SE101 (西から) 図版9 3 SK125 出土土型
 図版3 4 SE102 (東から) 1 第2遺構面出土平瓦 (凸面) 4 SK210 出土土釘
 1 第2遺構面 (北から) 5 SK112・113 (西から) 2 第2遺構面出土平瓦 (凹面) 図版15 1 SE101 出土鏡
 2 第2遺構面北西部上層遺構 (北西から) 6 SK114・115 (南西から) 図版10 2 第2遺構面出土土器・陶磁器 2 SK113 出土小柄
 3 第2遺構面北西部下層遺構 (南西から) 図版7 1 SX103 (南東から) 3 SK104 出土土瓦 3 SK112 出土金属製品1
 図版4 2 SX103 断面 4 SK112 出土土瓦・鉄釘 4 SK112 出土金属製品2
 1 SD201 (南から) 3 SK125 (西から) 5 SK101 断面 SK112 出土土器・陶磁器
 2 SD201 (北から) 6 SK106 断面 図版11
 3 SD201 断面

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯（第1図参照）

現在、旧高松城中堀の堀端に相当する都市計画道路、高松海岸線は拡幅・整備事業が計画されている。この事業の実施にあたっては、当路線が国史跡高松城に北接していること、かつ旧高松城跡の武家地と南接していることから、事業主体である高松市（都市計画課）と高松市教育委員会（以下、市教委）との事前協議を経て、市教委が拡幅工事の範囲について逐次、試掘調査を実施し、埋蔵文化財の包蔵状況の確認を行ってきた経緯がある。

当調査地点については同路線の拡幅部分に該当するものではないが、同事業における民有地との土地交渉に係る範囲となっており、北接する拡幅部分については平成15年度に試掘調査が実施され、旧高松藩での広範囲にわたる武家地である江戸長屋に北定される地区であること、これと合わせて遺構・遺物の確認状況を考慮した結果、当地点も含め周知の埋蔵文化財包蔵地に該当するものと判断された。

この後、高松市は当地点の土地交渉に係り、土地造成を行う計画を立て、平成19年5月16日に埋蔵文化財発掘通知（文化財保護法第94条第1項）を提出し、これに対し香川県教育委員会から事前に発掘調査を実施する旨の指導があった。

以上のような経緯のもと、同年6月から当地点の約84㎡を対象に市教委が発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

発掘調査は平成19年6月18日から、同年7月31日の間で実施した。調査面積は約84㎡で、遺構確認面については2面と想定した。市街地にあって狭小な敷地内での調査となったことから、廃土及び排水の処理については苦慮した。また期間の半ばには台風接近などにより、調査を中断した日が続いた。

以下、発掘調査期間中の主要な工程を記す。

- 6月18日～20日：重機掘削、遺構面精査
- 6月21日～7月17日：第1遺構面調査
- 7月18日：第2遺構面まで重機掘削
- 7月19日～27日：第2遺構面調査
- 7月30・31日：埋め戻し・撤収作業

整理作業については、高松市教育委員会文化振興課円座整理事務所にて調査終了時から翌年3月末までの期間で実施し、委託業務とした遺物写真撮影及び遺物保存処理業務についても同期間に完了した。



第1図 調査地位位置図（1/5,000）

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境 (第2図参照)

瀬戸内海に北面した香川県の高松中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km、南北16kmの範囲に及んでいる。またこの平野は、讃岐山脈から流下し、北へ流れて瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめて本津川・春日川・新川などによって形成された扇状地でもある。さて、高松城の城下町として発展した高松市街地は、香東川の東流路が瀬戸内海に注ぐ河川の中洲や砂堆上に立地している。香東川は現在、石清尾山塊の西を直線に北流する西流路のみだが、17世紀初頭、高松藩に割かれた西崎八兵衛の河川改修によって本化されたものである。なお、この庵川直前の流路は、現在、御坊川としてその名残をとどめる。

第2節 歴史的環境 (第3図参照)

高松市街地で初めて人の活動が認められるのは、松平大膳家上屋敷跡における発掘調査で、弥生時代後期の土器を伴う柱穴が多数検出された他、平安時代前期の溝が確認された。この後、平安時代後期には、この地域は寛原郷と呼ばれ、安楽寺院領である野原庄が高松城跡の南方に比定される。野原庄は白河院の勅使印が徳元年間(11世紀末葉)に立券壮号されたもので、康治2年(1143)8月19日の太政官符では野原庄の四季が条里により表記されていることから、条里地割または条里呼称がこの地に普及していたと考えられる。中世に入ると荘園以外にも、文安2年(1445)の「兵庫北関入船納帳」に船籍地としてあるように、港の機能が認められる。高松城跡西の九地区の発掘調査では、11世紀後半から13世紀前半の港湾施設に加え、搬入土器が高い比率で認められ、東浜に相当する東町奉行所跡の調査でも、同時期となる舟入状の流路を確認し、高比率の搬入土器が出土した。また浜ノ町遺跡では、白磁四耳壺の埋納遺構や区画溝をもつ13世紀末から15世紀末の集落跡が確認された。中世末期の状況を端的に示す事例に、寺町一丁目地区の発掘で出土した「野原濱村无量壽院」の刻書瓦が挙げられる。県内有数の古刹、无量壽院は天文年間(1574)に当地、野原郷八輪島に移転し、高松城築城に際して更なる移転を余儀なくされたことがその寺記にみられ、発掘成果と一致する。このようなことから、寺院を有する程の経済基盤をもつ港町であったと考えられ、砂堆や中洲上に中世都市が立地する状況は、博多や草戸ノ軒遺跡にもあるように全国的傾向に合致する。こうした背景の下、当地に高松城が築かれ城下町が整備されたと考えられる。

さて、高松城および城下町を造ったのが、豊臣秀吉の家臣、生駒親正である。秀吉の四国征伐により、天正13年(1585)長宗我部元親が降伏、讃岐四郡は仙石秀久・十河存保に与えられ、その後尾藤知宣の領国となったが、天正15年(1587)

には生駒親正が久し引讃岐17万石を領し、翌天正16年から数年を要し高松城を完成させた。北の守りは瀬戸内海に委ね、堀には海水を導く水城とされ、南方は大手(旧太鼓門)を構え、南側に城下町が展開する「後堅固」の城でもある。城の構造は、内堀・中堀・外堀となる三重の堀をめぐらし、内堀より内側に本丸・二ノ丸・三ノ丸などの曲輪を配する。本丸は更に堀により他の曲輪と独立し、本丸と二ノ丸をつなぐ轡橋を落とすことで敵の侵入を防ぐ構造で、本丸には天守閣と地久橋を備える。

寛永17年(1640)御家騒動により生駒氏は転封となり、代わって寛永19年には松平頼重が城主となり、東讃岐12万石を領した。頼重は城の改修を度々行い、寛文11年(1671)頃には東ノ丸を新造した他、月見櫓・続櫓・渡櫓などを造り、北に設けた水手御門より直接海へ出入りができるようにした。以後、松平氏は高松城主として明治維新を迎える。高松城は昭和29年(1954)に松平氏より高松市に譲渡され、翌年玉藻公園として市民に開放されるとともに、史跡として国指定され文化財の保護が図られている。

高松城に関する発掘調査は、現在まで多数の事例をもつ。本丸では天守台と地久橋台の石垣解体時に、地下室をもつことが判明した。何れも壁面は石積みにより構築された地下1階相当のもので、天守台には西面に出入口を備えるが、地久橋台にはなく建物内に付随していたものと考えられている。二ノ丸入り口にあたる鉄門の袖石垣解体時には、半地下式で小形の穴蔵が確認され、凝灰岩製の切石による床・壁面構造をもつことが判明している。また東の丸で香川県歴史博物館建設に伴う調査では、東ノ丸新造の際に開削された中堀が検出されている。以上のような中堀の内側、内曲輪において確認された遺構は、何れも松平初期に行われた改修に相当するものと考えられている。一方、武家地となる外曲輪についても、近年、調査事例が増加した。広範に調査が行われた西の丸町地区では、生駒期の重臣、上坂勘解由や松平期に大老職を占めた大久保家に由来する木簡や家紋瓦が出土した他、絵図と合致する鎌型の街路を検出するなど、各期における屋敷割の状況が明らかとなった。旧大手前にあたる丸の内側では、藩主連枝である松平大膳家の家紋をもつ理兵衛焼、瓦が出土し、検出された街路及び門跡が絵図と合致し、その屋敷であることが判明している。外堀大手に面した内町の概略では、弘化年間(1818)の絵図にその跡が記載された生駒時代末期の人物となる井戸遺構が検出され、その石積みから生駒家家紋が刻まれた石材が見つかっている。この他、外堀の東口付近となる鶴屋町では、松平末期の絵図に記された東町奉行所に相当する地点で、その堀跡とみられる遺構が確認されている。このように外曲輪では松平期の絵図、文献資料と発掘成果が対応する事例が数多くみられ、概ね屋敷割の変遷を辿ることができる。



第2図 遺跡位置図 (1/50,000)



第3図 高松城跡周辺発掘調査地位置図 (1/10,000)

1. 東ノ丸跡 (堀川中ノ丸跡) 2. 堀川中ノ丸跡 3. 本手堀門 4. 黒民小ノ丸跡 5. 多田歴史博物館跡 6. 西の丸跡Ⅱ 7. 西の丸跡Ⅲ 8. 作事丸 9. 西内町 10. 堀久井
11. 高松北警察署跡 12. 内町 13. 三ノ丸 14. 西の丸跡Ⅰ 15. 地久増台 16. 浜ノ町通 17. 片道町通 18. 丸の内地区 19. 松平大膳家上総敷跡
21. 三ノ丸 22. 電燈台北側 23. 丸の内 24. 寺町一丁目 (無量壽院) 25. 中屋 26. 丸の内 27. 丸の内 28. 丸の内 29. 丸の内 30. 丸の内 31. 丸の内 32. 丸の内 33. 丸の内 34. 丸の内
35. 丸の内 36. 丸の内 37. 丸の内 38. 丸の内 39. 丸の内 40. 丸の内 41. 丸の内 42. 丸の内 43. 丸の内 44. 丸の内 45. 丸の内 46. 丸の内 47. 丸の内 48. 丸の内 49. 丸の内 50. 丸の内
51. 丸の内 52. 丸の内 53. 丸の内 54. 丸の内 55. 丸の内 56. 丸の内 57. 丸の内 58. 丸の内 59. 丸の内 60. 丸の内 61. 丸の内 62. 丸の内 63. 丸の内 64. 丸の内 65. 丸の内
66. 丸の内 67. 丸の内 68. 丸の内 69. 丸の内 70. 丸の内 71. 丸の内 72. 丸の内 73. 丸の内 74. 丸の内 75. 丸の内 76. 丸の内 77. 丸の内 78. 丸の内 79. 丸の内 80. 丸の内
81. 丸の内 82. 丸の内 83. 丸の内 84. 丸の内 85. 丸の内 86. 丸の内 87. 丸の内 88. 丸の内 89. 丸の内 90. 丸の内 91. 丸の内 92. 丸の内 93. 丸の内 94. 丸の内 95. 丸の内
96. 丸の内 97. 丸の内 98. 丸の内 99. 丸の内 100. 丸の内

第3章 調査の成果

第1節 調査方法

調査地は現道と宅地及びビルに挟まれた細長い区画で、現況は更地となっている。既述の経緯や工程上の理由により、当調査では北半の街路拡幅範囲を除いた南半を対象とした。

調査の方法については、重機掘削の後、人力によって精査し遺構検出を行った。また調査地の西壁に沿って、重機により土層観察と排水溝を兼ねたトレンチを掘削した。遺構番号は、検出した順にその平面の形態から想定した性格のものを付けた後、遺構掘削を行った。測量は委託業務によって4級基準点及び水準点測量を行ない、調査地の脇に3箇所の基準点を打設した。この基準点をもとに、遺構図面、土層図等の作成を1/20 縮尺で行った。

第2節 主要遺構と基本層序（第4～6図参照）

調査では2面において、中世及び近世の遺構・遺物を確認した。調査時において各遺構面の出土遺物や層序から、概ね第2遺構面をⅢ世段階、第1遺構面を近世段階の所産として捉えられた。

調査地における各壁面の層序を大体的にみた結果では、表土に相当するコンクリート塊等を含んだ近現代の整地の下、瓦礫や陶磁器片を含む整地及び遺構埋土の堆積が厚く認められ、これより下位では褐色を呈した土壌化層及び砂礫層の堆積が観察された。また複数の遺構や整地が重複し、水平堆積を呈した範囲が少ないことから、これらの堆積層について全て人力による精査・掘削が望ましい状況であったが、当調査においては整地を重機により除去する段階で検出されたものを第1遺構面とし、第2遺構面については概ね最下層となる砂礫層上面で確認した。但し、第1遺構面についてはその下層遺構としてSX103を検出した他、第2遺構面についても北西部で上層遺構として検出できた土坑・柱穴群があり、平面的にも幾分かは重層的に確認し得た。

以下、調査地断面で観察された土層をその特徴からA～F層に分類し基本層序とし、遺構の出土遺物を整理した結果、把握できた所属時期について記す。

A層：表土に相当する整地である。コンクリート塊他、戦災痕とみられる焼土層を含み、太平洋戦争敗戦後の所産と推定される。

B層：C層の上位に堆積する黒色を呈した砂泥じりシルト層である。南西部では瓦碎片や小礫を含み、入念に整地されている。A及びC層との関係から、近・現代の所産と推定される。

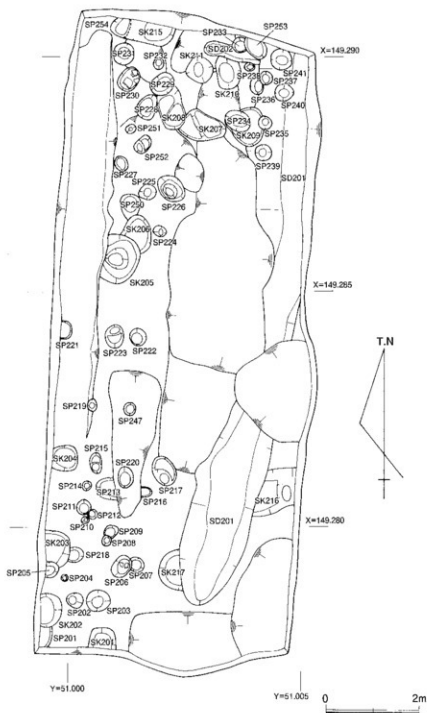
C層：黄灰あるいは灰黄色を呈したシルト質土である。焼土粒、炭を含む他、部分的に瓦片や黄色土を塊状に含む。概ねこの下位において、第1遺構面を検出した。第1遺構面で確認した遺構の大半が同系の埋土をもってお

り、SK125、SX102等から、概ね19世紀中葉以降の整地層と推定される。なお、調査地西壁ではC層下位に複数の掘り込みが観察されたが、トレンチ溝を挟んで東側では平面的に確認できなかったことから、第1遺構面に相当する時期で調査地の西側に広がる遺構が南北方向に並んで存在することが予想される。

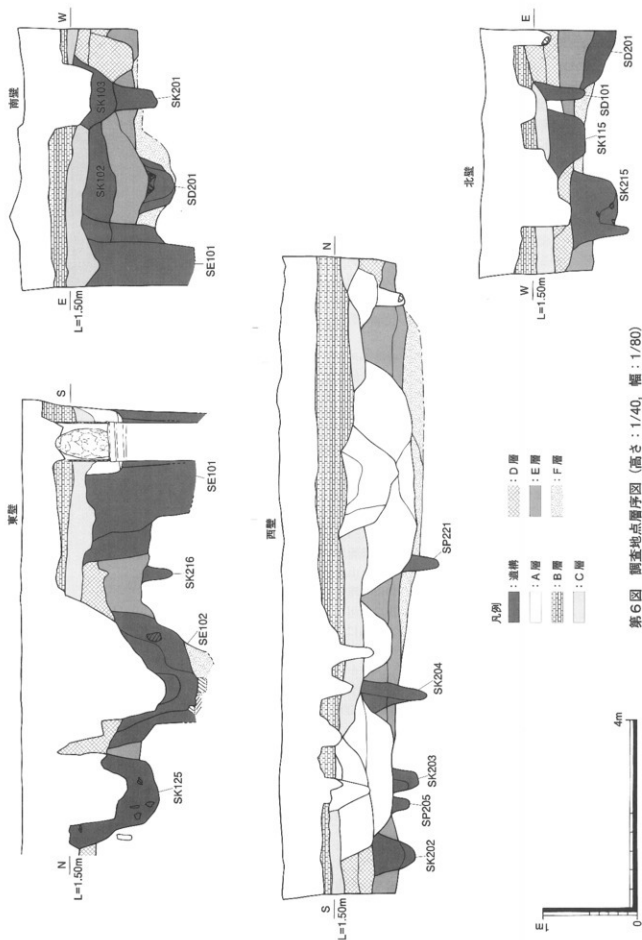
D層：第1遺構面で検出された遺構の基盤層に相当する整地である。炭・焼土粒を含んだ砂礫泥じりシルト～シルト質粘土層で、瓦・礫を多く含む特徴をもつ。同様に第1面下層遺構として検出されたSX103から、17世紀後半以降の所産と推定される。

E層：円礫をまばらに含み、黒褐～褐色を呈したシルト質土であり、自然層が土壌化したものと考えられる。北西部では、炭や赤褐色粒が混じってみられる。下位でよく似た土質で埋没したSD201の出土遺物から16世紀後半頃の堆積層と考えられる。

F層：自然堆積とした砂礫層で、上位から下位へと灰白色シルト質細砂～鈍い黄橙色砂礫～灰色砂礫となり、円礫の径径も大きくなる。北に向ってやや上昇するようで、北端部では5～20cm大の川原石が多く認められる。これより下位では、湧水を伴う。第2遺構面の調査後、可能な限り断ち割り調査を行ったが、F層よりも下位に存在する遺構は確認されなかった。



第4図 第2遺構面遺構配置図 (1/80)



第6図 調査地点層序図 (高さ : 1/40, 幅 : 1/80)

第3節 第2遺構面の遺構・遺物

SB201 (第7図)

調査地南西部で確認した南北棟の桁行3間、梁間1間の掘立柱建物跡である。検出レベルは標高0.8m前後である。主軸は、座標北より東に4度振っている。建物の柱穴の一部は上面が第一遺構面の下層の遺構によって削られ、建物の西側は調査区の関係上確認できておらず、調査区外へとさらに延びるものと考えられる。柱穴は直径30～45cmの円形のものと同幅50cm、短幅35cm程度の楕円形のものがあり、深さは25～30cmを測る。柱間距離は、北側2間分が1.5m、南側1間分のみが1.7mとなる。個々の柱穴検出時に柱痕や礎石等の痕跡は確認できなかったが、構成する柱穴SP206では平瓦を根固めとして転用している。埋土は灰褐色砂泥シルト質土が多く、他にオリブ黒色砂泥粘質土や暗灰黄色砂泥粘質土がある。西側柱列のほぼ中央に位置するSK204は、南北東西の柱列からややずれるため、この建物の一部を構成するものではない可能性が高い。

時期については、SK204以外の柱穴出土遺物から想定すると中世以降と考えられる。溝などと主軸が比較的近いことから、同じ時期の可能性も1分想定される。

SB201 出土遺物 (第8図)

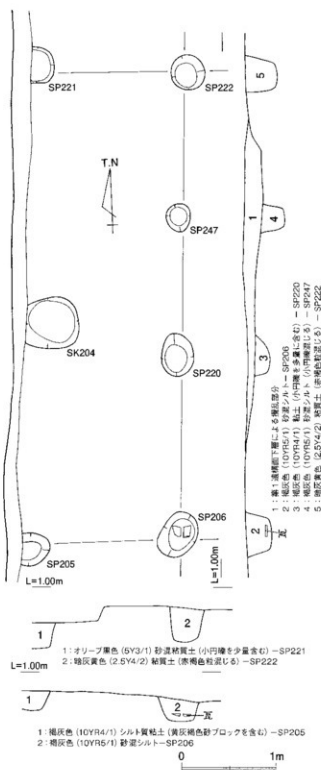
遺物はSP222から1、SK204から2～4、SP206から5が出土した。

1は弥生後期後半の甕で、口縁端部はヨコナデによって摘み上げ、胎土は角閃石を多量に含む。2は土師質土器の杯である。白色系の胎土である。3は瓦質土器の鉢である。口縁部の内外面ともにヨコナデ調整で仕上げ、内面は刷毛目調整のような痕跡が認められる。4は龍泉窯系青磁碗と考えられる。形態などから山本分類(山本2000)のI-2aに該当すると考えられるが小片のため確定はできない。5は平瓦片で、SP206の根固め用に転用されたものである。凹面の狹端部側を削り、凹凸面ともにナデ調整で仕上げている。

小片のため図化できなかったが、この他にSP206から弥生土器の甕、SP222から弥生土器の甕と土師質土器の杯、SP247から弥生土器の甕、須恵器の甕、SK204から甕と考えられる破片が出土している。

SD201 (第9図)

調査地の南東部やや中央寄りから北東隅に向かって掘削された溝で、更に北東へと伸びるものと考えられる。検出レベルは調査区北側で標高0.9m、南側で0.68mである。方向の主軸は座標北より東に約13度振れている。断面は舟底形である。調査区や第1遺構面の遺構による攪乱などによって大部分が削平されているが、確認できた範囲で長さ約11.8m、幅1.3～1.4mを測る。ただし、この溝の延長線上にあたる調査区南壁面の土層で溝の断面を確認できることから、さらに南側へと伸びている事が分かる。



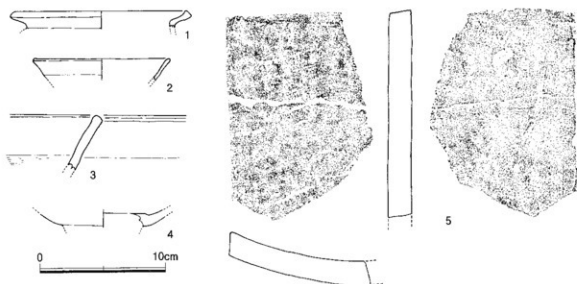
第7図 SB201 平・断面図 (1/40)

深さは南側で30cm前後、北側で40～50cmとなる。この深さの違いは、第2遺構面が北側に向かって高くなっていることから生じている。溝の底は湧水している。

出土遺物である土師質土器の足釜や鉢などから、概ね16世紀代に埋没したものと考えられる。

SD201 出土遺物 (第9図)

6～8は弥生後期後半の甕口縁部片である。口縁部は丁寧なヨコナデ調整によって仕上げ



第8図 SB201 出土遺物実測図 (1/3)

ている。8は底部で、外面は摩滅しており詳細は不明であるが、凹凸が認められ、工具などによる押さえや叩きなどの痕跡と考えられる。内面は刷毛目調整によって仕上げる。6は雲母を含み、7・8は角閃石を多量に含む。9～23は土師質土器の杯・小皿である。9は口径が非常に小さい小皿である。その他は80～120cm程度の口径となる。いずれの個体も口縁端部を丁寧なナデ調整によって仕上げているが、その中でも13・15・16はともにナデ調整によって口縁端部を断面三角形形状に仕上げるものであり、乗松編年(乗松2004)によれば、14世紀から15世紀によく認められる。その他のものは口縁端部を丸く整形するものである。17の外底部には板状圧痕が認められる。いずれの個体も比較的精良な胎土を使用しているが、中でも9～13・17は非常に精良である。また、14は赤褐色の砂粒を含む橙色系の胎土、10～12は橙色系の胎土で、それ以外は白色もしくは灰白色系の胎土のものである。24は土師質土器の断面三角形の高台のつく椀である。25は須恵器碗で佐藤分類(佐藤1993)のAⅡ・9・10と考えられる。薄い粘土紐をヨコナデによって貼り付けて高台を成形しているが、かなり形散化している。内底面は細かな刷毛目調整によって仕上げている。26は瓦器碗の高台の破片で和泉産と考えられる。高台は長方形の粘土紐を貼り付け、内底面には横方向の暗文風の篋磨きを施す。27・34・36は土師質土器の足登である。27が佐藤分類(1995)のC、34がB2である。28～31・35は土師質土器の鉢で、これらも同形式であるが、口縁部の形態に差異があり、佐藤分類(佐藤1995)で28がAⅠ、29・30がAⅡ、31・35がBⅡで、13～15世紀の時期幅をもつ。31は口縁部中位まで刷毛目調整が残存していることから、体部に刷毛目調整を行なった後、口縁部をヨコナデによって成形したことが分かる。35は煤が付着する。32は土師質土器の捏鉢もしくは摺鉢である。内面は一部刷毛調整を施し、内外

面を指オサエおよび指ナデによって整形している。33は土師質土器と考えられるが、弥生土器の器台もしくは脚部の可能性も想定される。ただし、破片であり内外面ともに摩滅しているため詳細は不明である。37は平瓦である。表面は煙し気味に仕上がる。凸面は横方向のケズリ後、縦方向のケズリを施す。凹面は横方向のケズリを施す。凹面の広(狭)端部および側端部は篋ケズリで整形する。

小片のため図化できなかったが、この他に備前焼と考えられる破片が出土している。

SD202・SK210 (第10図)

SD201から派生するような形で、東西方向に延びる細い溝で、長さ1.22m、幅0.31m、深さ0.1mを測る。検出レベルは標高0.84mである。東側をSD201と、その他にいくつかの柱穴によって切られ、南側に隣接するSK210を切っている。SK210の検出レベルは標高0.84mで、上面の一部が第1遺構面によって削られているが、長軸0.65m、短軸0.5m、深さ0.42mを測る。

時期は出土遺物からSD202は中世以降、SK210は弥生時代後期後半以降には埋没したものと考えられる。

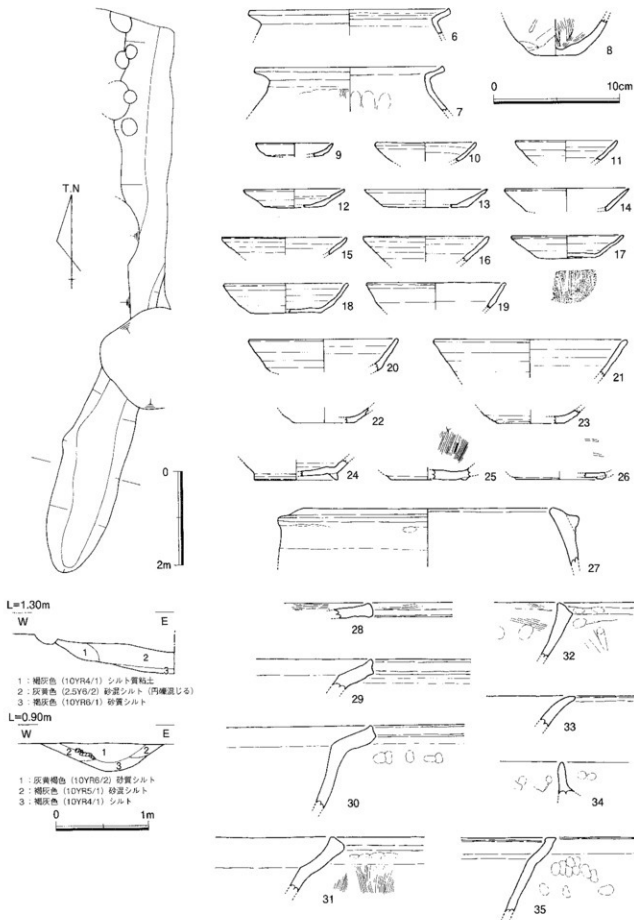
SD202・SK210 出土遺物 (第10図)

SD202から38、SK210から39・40が出土している。38は土師質土器の杯もしくは小皿である。外底面は篋切りによって切り離した痕跡が残る。39は弥生後期後半の甕である。角閃石および雲母を多量に含む。40は管状土鍾である。

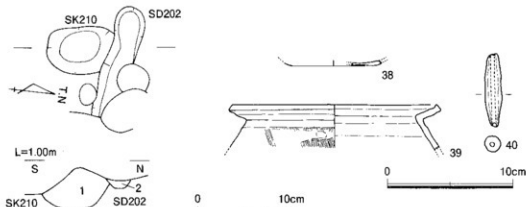
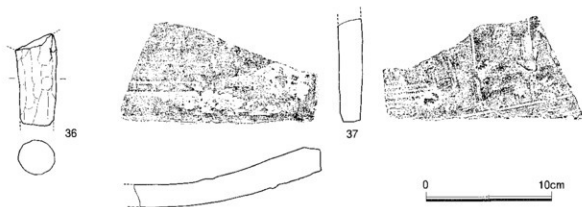
SK202 (第11図)

調査区南西隅に位置する楕円形の土坑である。検出レベルは標高0.77mである。調査区内で長幅0.73m、短幅0.47m、深さ0.45mを測る。

時期は、限定することはできないが出土遺物から中世前半と考えられる。



第9図 SD201 平・断面図 (1/40 · 1/80) · 出土遺物実測図 (1/3)



第10図 SD201 出土遺物実測図 (1/3), SD202・SK210 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3)

SK202 出土遺物 (第11図)

41は須恵器の碗で、佐藤分類(佐藤1993)のAⅡ-8と考えられる。ヨコナデによって整形されているが、外面の体部中位に施磨きを施している。

小片のため図化できなかったが、この他に弥生土器の甕の破片が出土している。

SK203 (第11図)

SK202の北側に位置する隅丸方形の土坑である。南側をSP205に切られる。検出レベルは標高0.8mである。調査区内で、長幅0.75m、短幅0.55m、深さ0.27mを測る。平面で柱状の痕跡を確認できたが、この柱穴によって構成される建物の平面プランなどは明らかにできなかった。

所属時期は限定できないが、出土遺物から10世紀以降と考えられるが、小片のため確定できない。

SK203 出土遺物 (第11図)

42は須恵器の杯で、佐藤分類(佐藤1993)の杯Bである。外底部は寛切りで、ヨコナデによって整形している。

小片のため図化できなかったが、この他に弥生土器の甕の破片が出土している。

SK208 (第11図)

調査区北側に位置し、北側をSP229に切られる隅丸

方形のテラスをもつ土坑である。検出レベルは0.93mである。長幅0.84m、短幅0.53m、深さはテラス部分が0.15m、最も深い部分が0.29mである。

時期は限定できないが、出土遺物から中世以降と考えられる。

SK208 出土遺物 (第11図)

43は弥生土器の高杯の脚部と考えられる。角閃石を含む。44は土師質土器の杯である。45は須恵器壺の底部で、佐藤分類(佐藤1993)の壺Cである。外面は格子目印きによって整形され、底部付近は工具によるナデ調整によって仕上げている。

小片のため図化できていないが、この他に須恵器の杯の破片が出土している。

SK209 (第11図)

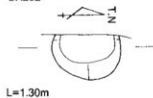
調査区北東部に位置し、SP234と235に切られる隅丸の三角形を呈する土坑である。特に西側はSP234によってかなり壊されている。検出レベルは標高0.85mである。残存箇所で長さ0.8m、深さ0.31mを測る。

時期は限定できないが、僅かな出土遺物から判断すると中世以降と考えられる。

SK209 出土遺物 (第11図)

46は土師質土器の杯である。外面に煤が付着しており、灯明皿として使用されていたと考えられる。

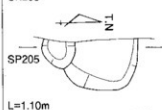
SK202



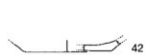
- 1: 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質シルト (黒・赤褐色粒を若干含む)
 2: 褐色 (10YR4/1) 砂質シルト (褐色・黒・赤褐色粒を若干含む)



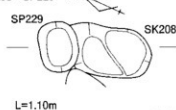
SK203



- 1: 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト (黄褐色を含む)
 2: 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質シルト
 3: 褐色 (10YR5/1) 砂質シルト—SP205



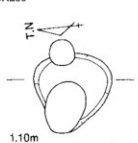
SK208・SP229



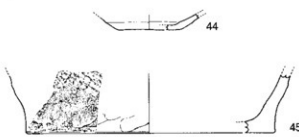
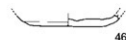
- 1: 褐色 (10YR5/1) 砂質シルト
 2: 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質シルト (小礫・黒・赤褐色粒を含む)



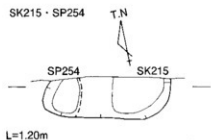
SK209



- 1: 褐色 (10YR5/1) シルト



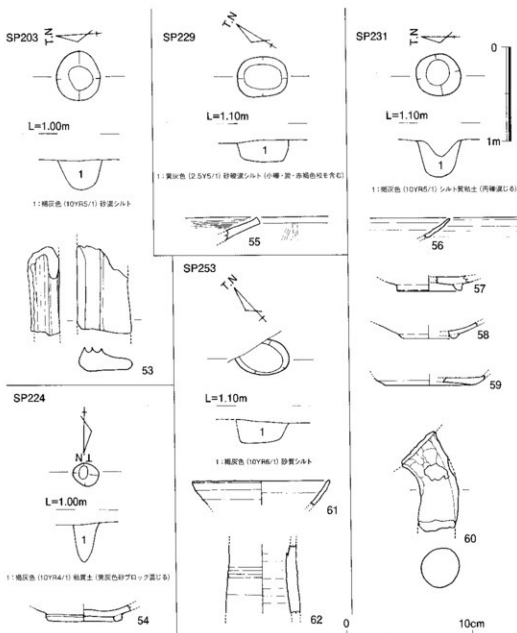
SK215・SP254



- 1: 褐色 (10YR5/1) 砂質シルト
 2: 灰オリーブ色 (5Y6/2) 砂質シルト (黄褐色土ブロックを含む)



第 11 図 SK202・203・208・209・215 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3)



第12図 SP203・224・229・231・253 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3)

SK215・SP254 (第11図)

調査区北西部で確認された東西方向の隅丸方形の土坑である。検出レベルは標高1.0mである。平面では確認できなかったが、断面の状況と遺物がSP254から集中して出土したことから、SK215はSP254によって切られているものと考えられる。SK215は調査区内で長幅0.95m、短幅0.45m、深さ0.55mである。SP254は長さ0.4mの隅丸方形のピットである。

時期は出土遺物からSP254は16世紀後半と考えられ、SK215はそれ以前の所産と考えられる。

SP254 出土遺物 (第11図)

47は須恵器の杯で、佐藤分類 (佐藤 1993) の杯B IVと考えられる。48は瓦質を呈する土釜で、非常に粗い作りである。49は土師質土器の鍋の口縁部片で、佐藤分類 (佐藤 1995) のA IIである。50は土師質土器の足釜の脚部である。51は土師質土器の飯蛸甕で、内面はナ

デ調整、外面は指押さえによって整形している。52は備前焼の陶器播鉢の口縁部片である。口縁部外面には凹線が1条入る。内面に一部摺り目が確認できる。

図化していないが、この他に緑色片岩が出土している。

その他の土坑出土遺物

この他の土坑から小片のため図化できなかったが、SK205から土師質土器の杯、SK207から黒色土器と考えられる破片が出土している。

SP203 (第12図)

調査区南西部に位置する楕円形のピットである。検出レベルは標高0.72mである。長幅0.52m、短幅0.47m、深さ0.31mである。

時期は限定できないが、出土遺物から古代以降と考えられる。

SP203 出土遺物 (第 12 図)

53 は土師質土器竈の焚口部の破片と考えられる。

小片のため図化できなかったが、この他に弥生土器の甕が出土している。

SP224 (第 12 図)

SK206 の東側に隣接する楕円形のピットである。検出レベルは標高 0.84m である。長幅 0.3m、短幅 0.25m、深さ 0.39m である。

時期は出土遺物から 13 世紀前半以降と考えられる。

SP224 出土遺物 (第 12 図)

54 は須恵器の高台がつく椀で、佐藤分類 (佐藤 2000) の椀 A II-7 と考えられる。高台は断面方形の粘土紐をヨコナデによって貼り付けている。

SP229 (第 12 図)

調査区北西部に位置する隅丸方形のピットである。検

出レベルは標高 0.92m である。長幅 0.54m、短幅 0.42m、深さ 0.23m を測る。

時期は出土遺物が僅かのため限定できない。

SP229 出土遺物 (第 12 図)

55 は土師質土器の甕の口縁部片と考えられるが、小片のため詳細は不明である。内面は横方向の刷毛調整、外面は縦方向の刷毛調整によって仕上げている。

小片のため図化できなかったが、この他に須恵器の椀と考えられる小片が出土している。

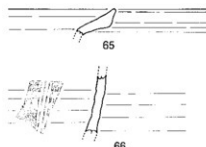
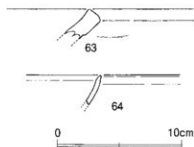
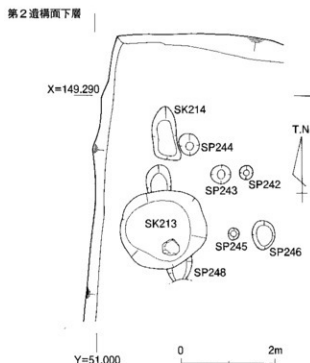
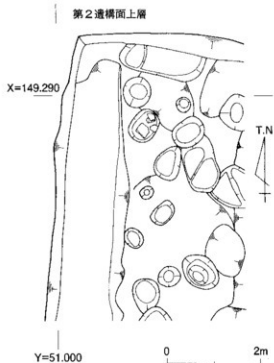
SP231 (第 12 図)

調査区北西部に位置する直径 0.5m、深さ 0.61m の円形のピットである。検出レベルは標高 0.94m を測る。

時期は、須恵器椀や白磁などから 13 世紀後半以降と考えられる。

SP231 出土遺物 (第 12 図)

56 は土師質土器の杯の口縁部片である。白色系の胎



第 13 図 第 2 遺構面下層検出平面図 (1/80)、掘削時出土遺物実測図 (1/3)

土である。57は土師質土器の高台がつく椀である。58は須恵器の高台がつく椀で、佐藤分類(佐藤 2000)のA II-10と考えられる。細く扁平な粘土紐を貼り付けて高台としている。59は白磁の小皿と考えられ、残存していないため限定はできないが口縁部は口禿になる可能性が考えられる。60は土師質土器の足釜の脚部である。

SP253 (第12図)

調査区北東部に位置し、調査区外へとのびる楕円形のピットである。検出レベルは標高0.9mである。調査区内で長幅0.55m、短幅0.47m、深さ0.18mを測る。

所属時期は限定できないが、中世以降と考えられる。

SP253 出土遺物 (第12図)

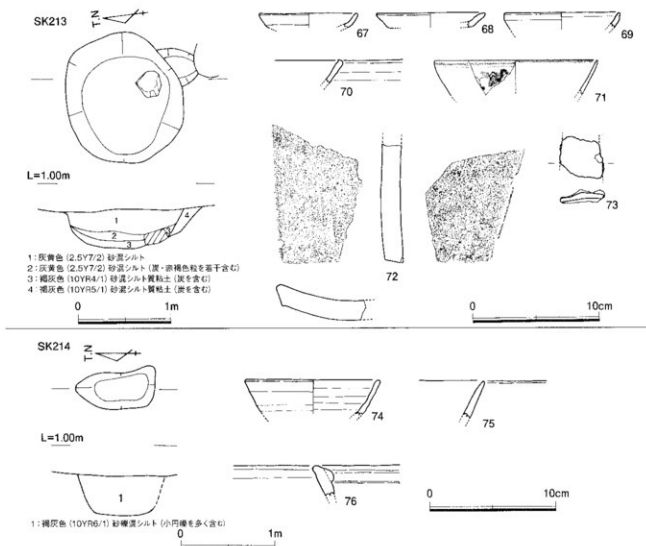
61は土師質土器の杯もしくは小皿である。62は須恵器の長頸瓶の頸部で、佐藤分類(佐藤 1993)の竈Aである。頸部中位には沈線が2条めぐらし、外面には自然釉が認められる。胎土などから、陶(十瓶山)窯跡産ではない可能性が想定される。

その他のピット出土遺物

小片のため図化できなかったが、この他にSP217から土師質土器の杯、SP227から土師質土器の杯、須恵器の甕、SP230から土師質土器の杯、SP232から弥生土器の甕の小片が出土している。

第2遺構面下層 (第13図)

調査地北西部では、遺構検出段階に基盤層である砂礫が認められず、黒く汚れた土が基盤層となり、遺構が掘りこまれていた。そのため、この付近は遺構検出の段階から井戸などの大型遺構もしくは下層の別の遺構面の存在が想定された。従って、上層の遺構を掘削、記録作成後に一段下げて遺構の検出を試みた。その結果、下層から土坑やピットをいくつか確認することができた。そのうち、SK213、SK214について詳述する。後述する下層遺構の年代は、出土遺物などから16世紀後半から17世紀と考えられる。そのため、上層とはほとんど時期差はなく、下層部分の遺構が形成された後、すぐに埋められ、その後新たに周辺が利用されたものと考えられる。



第14図 SK213・214 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3)

下層掘削時出土遺物 (第 13 図)

63・65 は土師質土器の銅で、佐藤分類 (佐藤 1995) の 63 が B、65 は A II である。64 は須恵器の碗の口縁部片である。口縁端部にヨコナデを施す。66 は甕前焼の播鉢の体部片である。内面には濡り目認められる。

小片のため図化できなかったが、この他に甕前焼の壺、青磁の碗と考えられる破片が出土している。

SK13 (第 14 図)

調査地北西部に位置する直径約 1.3m 前後のやや歪な円形の土坑である。検出レベルは標高 0.68m である。

時期は青花碗から判断すると 16 世紀末から 17 世紀初頭と考えられる。

SK 213 出土遺物 (第 14 図)

67～69 は土師質土器の杯である。69 は口縁端部にヨコナデし、断面三角形に仕上げるものである。67 は黄白色系の胎土で、残りは橙色系の胎土である。70 は土師質土器の口縁部片である。71 は青花碗で小野分類 (小野 1982) の F 群・X 型式と考えられ、軸などから漳州窯系磁器の可能性が考えられる。口縁部の内外面に四方嚢文、体部外面に唐草文を施す。72 は平瓦で、内外面ともにナデによって仕上げる。73 は板状の鉄器である。破片であり、錆が著しいため詳細は不明である。図化していないが、この他に動物骨が数個体分出土している。

SK 214 (第 14 図)

調査区北西部に位置するやや変形した方形の土坑である。検出レベルは標高 0.68m である。長幅 0.86m、短幅 0.4m、深さ 0.4m を測る。

時期は出土遺物から 16 世紀後半と考えられる。

SK 214 出土遺物 (第 14 図)

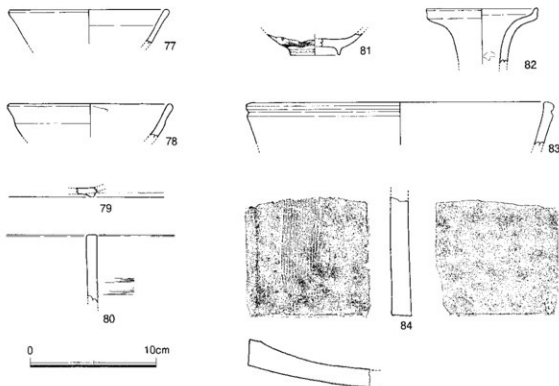
74 は土師質土器の杯と考えられる。75 は弥生土器もしくは土師質土器であるが、破片であり、器面が磨耗しているため詳細は不明である。76 は土師質土器の足釜の口縁部で、佐藤分類 (佐藤 1995) の足釜 C である。

小片のため図化できなかったが、この他に須恵器の甕と考えられる破片が出土している。

第 2 遺構面検出時出土遺物 (第 15 図)

77～78 は土師質土器の杯もしくは碗と考えられ、胎土は橙色を呈する。79 は土師質土器の高台がつく碗で、白色系の胎土である。小片のため詳細は不明である。80 は土師質土器の破片で火鉢の可能性が考えられるが、小片のため詳細は不明である。81 は肥前系染付けの碗で、高台内に銘をもつが、破片のため内容は不明である。高台に嚢文を施す。82 は肥前系磁器の青磁の仏花瓶である。83 は施釉陶器の鉢で、産地等は不明である。84 は平瓦で、ぶい黄灰色を呈し、内面に御描きが認められる。

小片のため図化できなかったが、この他に弥生土器の甕、須恵器の甕が出土している。



第 15 図 第 2 遺構面遺構検出時出土遺物実測図 (1/3)

第4節 第1遺構面の遺構・遺物

SA101 (第16図参照)

調査地中央部において、南北方向に確認した櫛列状遺構である。検出高は1.15～1.23 mで、主軸方向N-5°-E、検出長約10 mの5間相当で認められる。確認範囲が狭いため、南北方向に更に延伸する可能性がある他、西方向に展開し建物を構成する可能性も残る。

各柱穴は平面で円、あるいは隅丸方形を呈しており、規模は0.4～0.8 m、深度は0.14～0.42 mである。柱間距離についても1.8～2.2 mの長短をもって認められる。柱穴の断面は台形、あるいはU字形を呈し、埋土については概ね瓦片や礫が混じった固く締まったシルト質土となっている。また埋土の上端には、焼土・炭を含んだ浅い窪みをもつものが多く、石材の抜き取り痕とみられ礎石建ちの構造となることが想定される。

出土遺物はP-1から少量あり、肥前系磁器鉢や肥前系陶器皿、土師質土器の細片が認められる。所属時期については、これらの出土遺物及び遺構面から概ね18世紀～19世紀中葉の所産と考えられる。

SE102 (第17図参照)

調査地中央の東端において確認した井戸状遺構である。一部調査範囲外へ広がり大半が攪乱坑によって壊されているが、北肩部の遺存は良く、この検出高は0.98 mを測る。掘り方の平面は円形状で、径2.2 m前後と推定される。深度はほぼ海拔高まで及んでおり、多量の湧

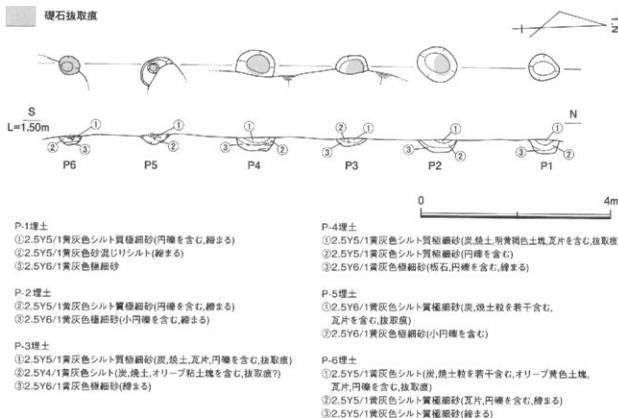
水が認められる。またSX101と重複関係では、先行することが平面において確認できた。壁面や底部において人頭大の川原石が散在してみられたことから、本来の井側には石組が用いられたと推定される。調査地の東端で観察できる上層断面では、①～③層の埋土と石組の裏込め土と考えられる④層に分割され、遺存状態の良い北肩部で段付の掘り方となっていることが観察された。

出土遺物は少量の土師質土器のみだが、検出に伴ってコンテナ1/4箱程度の陶磁器・瓦片が出土している。所属時期については、検出時の遺物によれば19世紀前半頃に廃絶した可能性が残るものの、基本層序でD層に先行しE層を基盤としていることから、16世紀後半以降で17世紀後半までの所産と推定される。

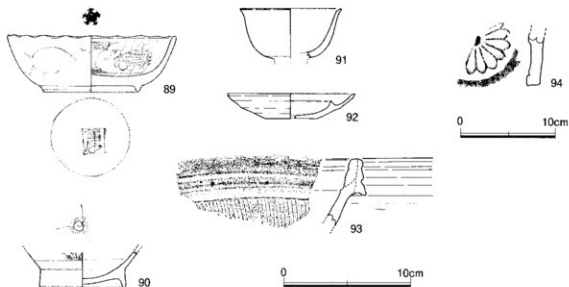
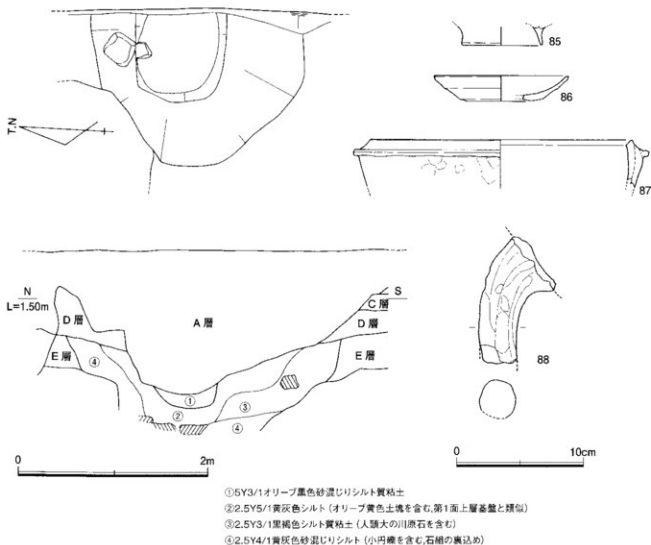
SE102 出土遺物 (第17図参照)

85・86は掘り方埋土とした裏込め層の出土遺物で、(古備系)土師質土器碗底部及び土師質土器皿である。87・88は埋土からの出土遺物で、土師質土器足釜の口縁部及び脚部である。

89～94は、検出時に認められた出土遺物である。89・90は肥前系磁器で、コンニャク印判をもつ染付輪花皿(89)と広東碗の底部(90)である。91・92は京・信楽系陶器で、端反碗(91)と灯明皿である。93は備前系陶器描鉢で、口縁部の形態が白神編年(白神1992)のⅡ型式に該当し堺・明石産と推定される。94は菊丸瓦の細片である。



第16図 SA101 平・断面図 (1/80)



第17図 SE102平・断面図 (1/40), 出土遺物 (1/3), SE102 検出時出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

SE101 (第18図参照)

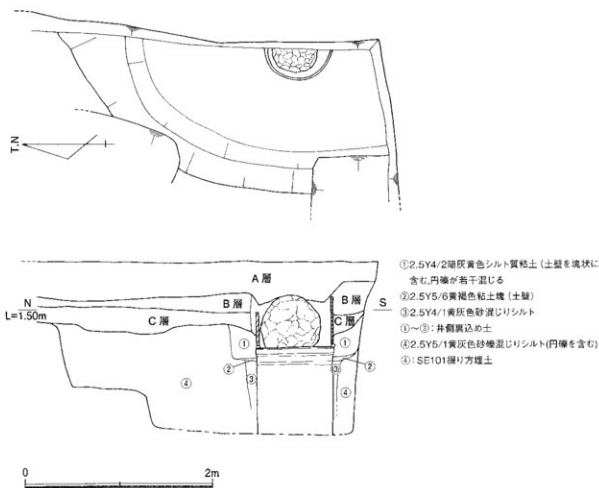
調査地南東隅において確認した井戸跡である。井側が調査地東壁にかかって認められるもので、その掘り方の一部を平面で検出した。掘り方の検出高は0.99 m、深度は0.8 m程を測るもので、段掘りがされている。大半は調査範囲の外に広がるが、遺存する井側に対して大きな掘り方となっている。

井側については、土師質製で2段認められる。下段の井側の設置と上下段の井側の繋ぎ目に上壁を用いており、固定あるいは防水処理を目的としたものと考えられる。下段の井側は完存し、外面の1線下端には籐状の押印文が認められる。上段のものについては破損し、花崗岩製の石臼によって塞がれ廃棄されている。また下段に設置された井側の下端より、多量の湧水が認められた。

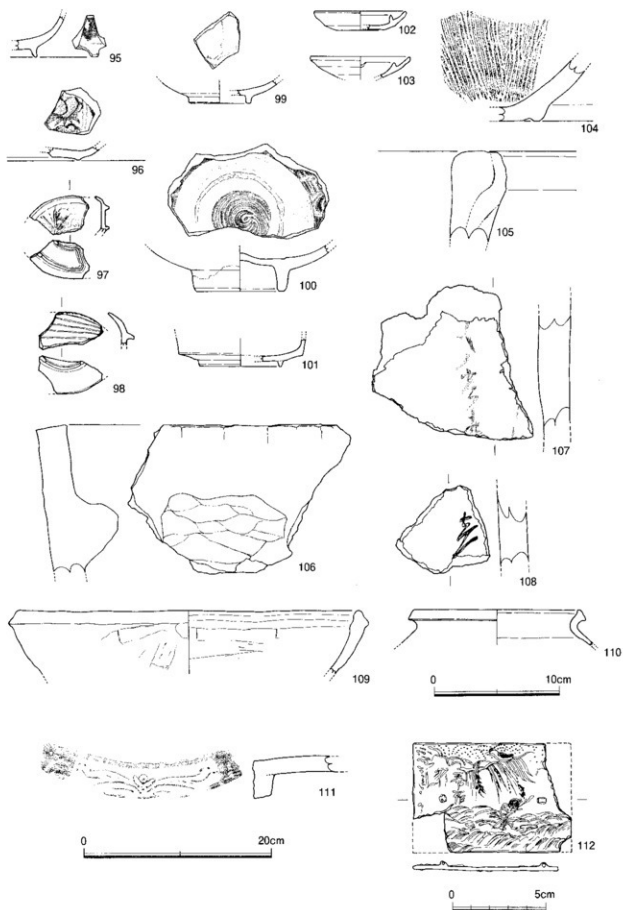
調査地の東・南壁で認められる土層から、掘り方は第1遺構面に属することが分かるが、井側の上段部分は近現代の整地層に及んでいる。掘り方の出土遺物については井側の破片を含むコンテナ1/2程度あり、これらを総合して考えると19世紀中葉頃に掘り方が掘削され、井側の改修を行いながら近現代に至るまで井戸として使用されていたことが推察される。

SE101 出土遺物 (第19図参照)

95～98は、肥前系磁器である。95は染付碗、96は蛇ノ目凹型高台の染付皿である。97・98は小形の変形皿で、97は糸切り細工により成形されている。98は内面に陽刻文をもち、1紅が施されている。99・100は、肥前系陶器である。99は京焼風の皿。100は内面に刷毛目文様をもった鉢で、見込みには蛇ノ目糸割ぎを施している。101・102は、京・信楽系陶器である。101は筒形の碗、102は灯明皿である。102は施釉を行わず、塗土を施している。103・104は備前系陶器で、灯明皿(103)及び播鉢の底部(104)である。105～108は、井側に用いられたと考えられる大形の土師質土器。105・106は1線部で、106には把手が付く。107・108は体部片で、外面に文字が記されている。107は墨書で記され、「□ノ老(蓋)相」と判読される。108は刻書で「壺」、あるいは「蓋」の字を記したものと考えられる。109は土師質土器播鉢、110は弥生土器甕の口縁部である。111は軒平瓦で、甕のつく子葉と陽刻線で表現された三葉の中心筋をもつ。112は、銅製の手鏡である。小形の方鏡で、鏡背には1対の鈕が付く。文様は柳に旅人と見られる人物を主題としたもので、「天下一作」の文字が施されている。



第18図 SE101 平・断面図 (1/40)



第 19 図 SE101 出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)

SK101 (第20図参照)

調査地南西部において確認した埋蔵である。埋蔵には土師質製のものが用いられているが、上半部は破壊されている。体部の径は0.5 m程で、埋蔵の掘り方は0.6 m程の円形に検出できた。検出高は、1.24 mを測る。埋蔵の中から、比較的多数の出土遺物があり、図化したような陶磁器片の他、瓦片や板ガラスの細片が認められる。

所属時期は出土遺物から、概ね19世紀後半頃の所産と推定される。

SK101 出土遺物 (第20図参照)

113は肥前系磁器で、染付輪花皿である。焼継ぎ痕と金彩による傷隠しがみられ、高台内に焼継ぎ印が記されている。114は京・信楽系陶器で、小杯である。渦高台で挟りをもつ。115・116は、施釉陶器の急須及び鍋である。115の急須は、白土によるイッチン描きの施文が認められる。116の鍋は、外面にトビカンナと鉄泥を施している。

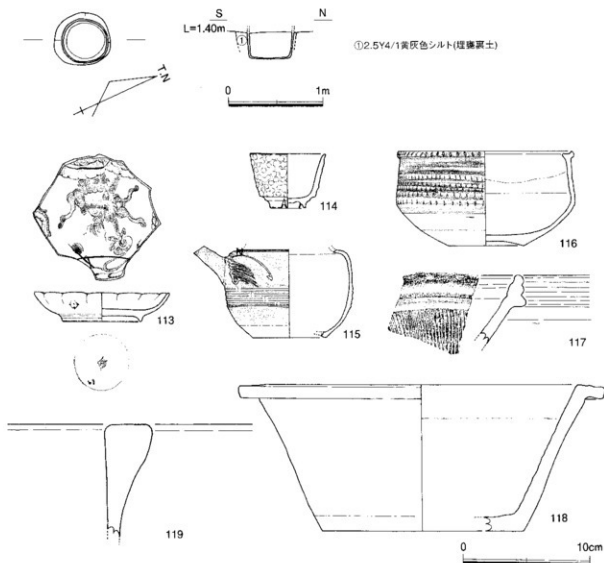
117は備前系陶器指鉢で、口縁部の形態が白神福年(白神1992)のⅡ型式に該当し、堺・明石産と推定される。118は施釉陶器の鉢である。赤色に焼き締まり、暗赤褐色の釉が施されている。119は土師質土器で、大甕あるいは井戸の口縁部と考えられる。

SK102 (第21図参照)

調査地南西部において確認した土坑である。検出高1.24 m。平面で西端を欠くが、幅1.2 m程の隅丸方形を呈する。断面は舟底形を呈し、深度は0.18 mとなる。埋土は2分層できるが、上・下層とも炭・焼土粒を含み上層部には多量の円礫が混じる。出土遺物は少量で、瓦片のみである。所属時期については、SK103、SX102に後出する重複関係から19世紀中葉以降の所産と考えられる。

SK102 出土遺物 (第21図参照)

120は三巴文の軒丸瓦である。



第20図 SK101 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3)

SK105 (第21図参照)

調査地南部において確認した土坑である。検出高1.23 m、平面は0.8～1.0 m程の不整形な円形を呈し、西壁に段をもち底部が楕円となる。深度は0.46 mを測り、埋土は2層に分層できる。上・下層ともシルト質土で、上層部は焼土粒、瓦片を含み、下層では褐鉄鉱の沈着が認められる。出土遺物は少量で、図化したものの他、肥前系陶器、土師質土器、土師質土器、瓦細片が認められる。所属時期については、平面の重複関係でSA101 P-5を後出して検出されていることから、概ね19世紀中葉頃の所産と推定される。

SK105 出土遺物 (第21図参照)

121は鉄釘である。

SK106 (第21図参照)

調査地南部において確認した土坑である。検出高1.24 m、平面は0.8 m程の円形を呈し、東壁に弱い段をもち底部が長方形に下がる。深度は0.18 mを測り、埋土は2分割される。上・下層とも炭、焼土粒を含んだシルト質土で、上層部においては、黄色を呈した土塊や瓦片が認められる。出土遺物は少量で、図化したものの他は土師質土器細片のみである。所属時期については、平面の重複関係でSK126に後出して検出されていることから、概ね19世紀中葉頃の所産と推定される。

SK106 出土遺物 (第21図参照)

122は、土師質土器である。胎土は鈍い橙色を呈し、底部には回転糸切り痕が残る。

SK108 (第21図参照)

調査地西部において確認した土坑である。検出高1.21 m、平面については北及び西側が欠くが、概ね長さ2 m程の長方形と推定される。深度は0.2 mを測り、埋土は炭、焼土粒、小円礫を含むシルト質土の単層である。出土遺物は少量で、図化したものの他、肥前系磁器瓶、京・信楽系陶器端反碗、軟質施釉陶器、土師質土器、瓦細片がある。所属時期については、これらの出土遺物及び遺構面から概ね19世紀中葉頃の所産と推定される。

SK108 出土遺物 (第21図参照)

123は京・信楽系陶器で、焼絵を施した碗である。124は瀬戸・美濃系陶器で、緑釉を施した(植木)鉢口縁部である。125は菊丸瓦である。126は軒平瓦である。巴の中心飾をもち、高松城編年(佐藤2003)の様相5に相当する。

SK104 (第22図参照)

調査地南部において確認した土坑である。検出高1.22 m、平面は長さ2 m、幅1.2 m程の長方形を呈するもので、南端の底面が楕円形に窪む。深度は最深で0.52 mを測り、埋土は3層に細分される。埋土は基本的に炭、焼土粒、瓦円礫を含んだシルト質土で、堆積状況から北方向からの整地により埋没したものと推察される。出土遺物は少量で、図

化したものの他、肥前系磁器瓶、備前系陶器、土師質土器細片、瓦丸片がある。所属時期については、平面の重複関係で、SK120より先行しSE101の掘り方より後出して検出されていることから、概ね19世紀中葉頃の所産と推定される。

SK104 出土遺物 (第22図参照)

127は肥前系磁器で、染付の鉢である。128は平瓦で、凹面にナデ調整を加えるが、凸面が未調整となっている。129はほぼ完存する丸瓦で、長さ25.4 cm、幅12.9 cmを測る。凹面側にはコビキ、布目瓦痕に加えて吊紐痕が認められる。130は軒丸瓦。131～134は、鉄釘類である。

SK114 (第23図参照)

調査地北部において確認した土坑である。検出高1.10 m、平面は1.1～1.3 m程の円形を呈する。深度は0.44 mを測り、断面は台形を呈する。埋土は細分され、上位に瓦礫、炭、焼土粒を含むシルト質土が堆積し、下位では砂土となって認められる。隣接する遺構の重複関係では、SK115を切り、SK113に切られて検出された。出土遺物は少量で、図化したものの他、肥前系磁器碗、同鉢、軒平瓦の細片がある。

SK114 出土遺物 (第23図参照)

135は肥前系磁器で、染付の紅猪口である。136は施釉陶器火入である。外面に黄灰色の釉を掛け、赤色の上絵を施す。胎土は褐色を呈し、富田・理兵衛焼と推定される。

SK115 (第23図参照)

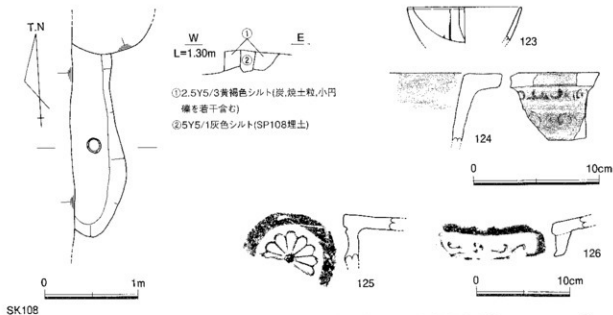
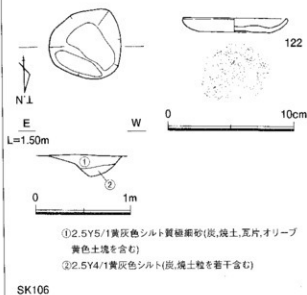
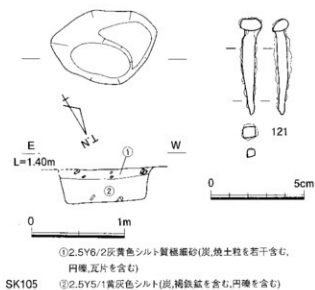
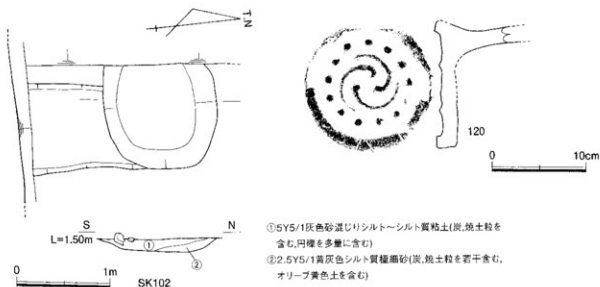
調査地北端において確認した土坑である。検出高1.12 m、北端が調査地外へ延びるが、平面は概ね1.5 m程の方形を呈するものと推定される。深度は0.22 mを測り、埋土は2層に分層できる。上層の堆積物には人頭人の角礫の他、炭、焼土、黄色土塊、瓦礫を含んでおり、整地により埋没したと考えられる。下層には、炭を含んだシルト質土が堆積する。出土遺物は少量で、図化したものの他、肥前系磁器碗、同瓶、肥前系陶器刷毛目鉢がある。所属時期については、出土遺物及び遺構面から概ね18世紀後半～19世紀中葉頃の所産と推定される。

SK115 出土遺物 (第23図参照)

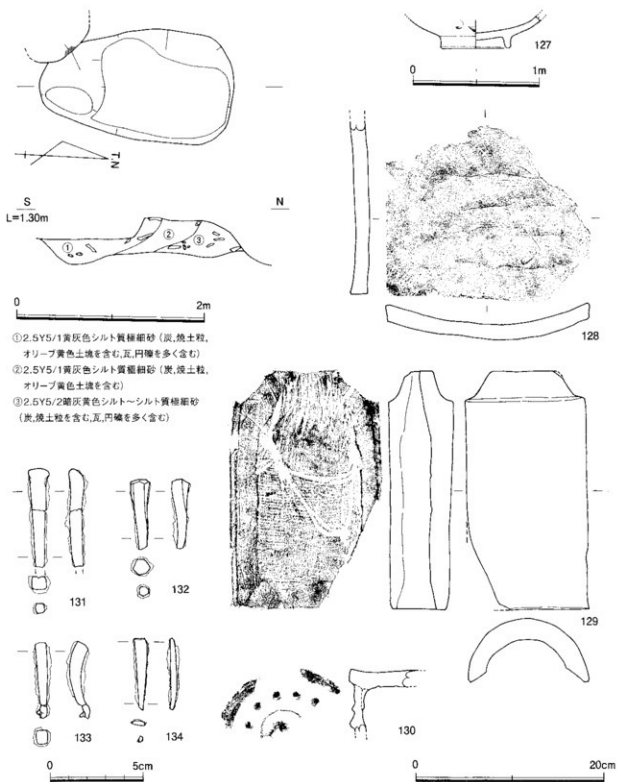
137は肥前系磁器の紅猪口である。

SK116 (第23図参照)

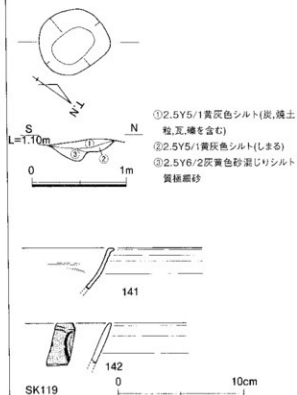
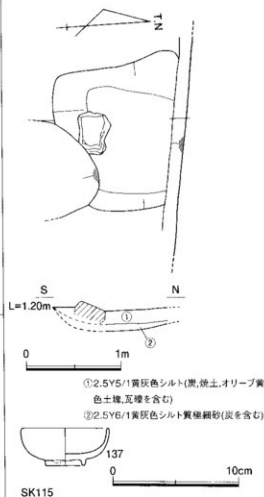
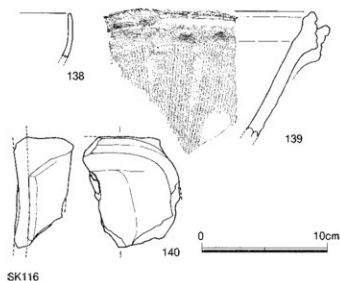
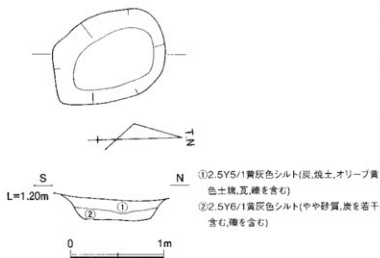
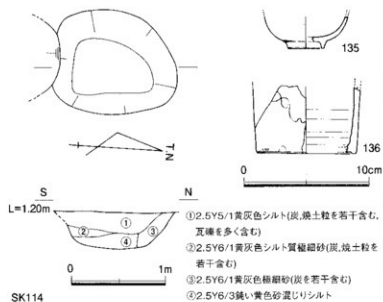
調査地北端において確認した土坑である。検出高1.14 m、平面は0.94～1.2 mの楕円形を呈する。深度は0.41 mを測り、断面は台形を呈する。埋土は2層に分層できる。上層の堆積物は炭、焼土、黄色土塊、瓦礫を含んでおり、整地により埋没したと考えられる。下層には、炭、礫を含んだシルト質土が堆積する。出土遺物は少量で、図化したものの他、肥前系磁器碗、肥前系陶器皿、京・信楽系陶器色絵碗がある。出土遺物及び遺構面から概ね18世紀後半～19世紀中葉頃の所産と推定される。



第21図 SK102・105・106・108 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)



第 22 图 SK104 平·断面图 (1/40), 出土遗物实测图 (1/3, 1/4, 1/2)



第23図 SK114・115・116・119平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3)

SK116 出土遺物 (第23図参照)

138は肥前系陶器で、京焼風碗の口縁部である。139は、備前系陶器標鉢の口縁部である。口縁部及び描目の特徴から、乗岡編年(乗岡 2002)の近世2b・3期に相当する。140は土師器で、竈の焚口部分の細片と考えられる。

SK119 (第23図参照)

調査地北東部において確認した土坑である。検出高1.01m、平面は0.7m前後の円形を呈する。深度は0.26mを測り、埋土は3層に分層できる。上層は炭、焼土、瓦礫を含むシルト質土で、中層の締まったシルト層を挟み、底の段部に下層の砂混じりシルト質土が堆積する。出土遺物は少量で、図化したもの他、土師質土器皿・火鉢の細片がある。所属時期については、平面の重複関係でSK112に後出して検出されていることから、概ね19世紀中葉以降の所産と推定される。

SK119 出土遺物 (第23図参照)

141・142は、中国産磁碗の口縁部である。141は口縁部が「く」字形に外反し、内面に櫛目が認められ横田・森田分類(横田・森田 1978)で白磁碗Ⅵ類に相当する。

142は龍泉窯系青磁で、内面に片彫りの施文が認められる。

SK120 (第24図参照)

調査地南部において確認した土坑である。検出高1.22m、南半をSX102により切られているが平面は0.7～0.9m程の楕円形を呈してみられる。深度は0.37mを測り、埋土は2層に分層される。上・下層とも若干の炭、焼土を含むシルト質土だが、上層がやや締まる。出土遺物は少量で、図化した土師質土器のみである。所属時期については、平面の重複関係でSK104に後出して検出されていることから19世紀中葉頃の所産と推定される。

SK120 出土遺物 (第24図参照)

143は、土師質土器皿である。胎土は灰白色を呈し、見込みに仕上げナデ、底部には板状正痕が認められ高松城編年(佐藤 2003)の皿Ⅴ形式に相当する。144は土師質土器甕の口縁部で、胎土は鈍い橙色を呈する。

SK122 (第24図参照)

調査地北西隅において確認した土坑である。検出高1.07m、南半を欠くが平面は0.6m程の円形を呈するものと推定される。深度は0.52mを測り、埋土は2層に分層できる。上層は炭、焼土粒、瓦片を含むシルト質土で、下層は若干の炭を含んだシルト質土である。出土遺物は少量で、図化したもの他、土師質土器足釜、丸・平瓦細片がある。所属時期については、遺構面から概ね19世紀中葉頃の所産と推定される。

SK122 出土遺物 (第24図参照)

145は砥石である。

SK126 (第24図参照)

調査地南部において確認した土坑である。検出高1.23m、平面は上端が歪になっているが、段が付く内側では径0.75m前後の円形を呈している。SX103を基盤として、深さ0.67m前後まで開削されている。埋土は3層に分層でき、上・中層は瓦や黄色土塊、炭、焼土粒を含んだ粘質土で、下層は円礫を含む締まった灰色粗砂層である。全体的に井戸状を呈しているが、湧水層には及んでいない。出土遺物は少量で、図化したもの他、肥前系磁器端反碗、肥前系陶器皿、同鉢、京・信楽系陶器瓶、備前系陶器指輪がある。所属時期については、出土遺物から概ね19世紀中葉頃の所産と推定される。

SK126 出土遺物 (第24図参照)

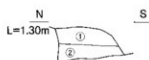
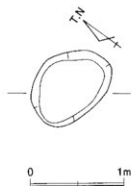
146は、土師質土器足釜である。147は施釉陶器小杯で、鳥を描く鉄絵と高台に挟りをもつ。

SK112 (第25図参照)

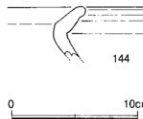
調査地北部において確認した土坑である。検出高1.12m、SK113・118に切られるが、平面は1.7m足らずの円形を呈している。深度は0.94mを測り、断面は上方で段が付く。埋土は4分割され、上層は炭、焼土、土壁、小円礫を含むシルト質土で、中層の極細砂層を挟み下層では、炭や土壁を含んだシルト質土が堆積しており多量の遺物が認められた。土坑としたが、最下層の小円礫を含む灰色砂質土において湧水が認められ、出土遺物に井筒とみられる土師質土器片が多数認められたことから、井戸跡であった可能性が考えられる。出土遺物はコンテナ5箱分あり、図化したもの他にも肥前系磁器碗・皿・瓶、肥前系陶器刷毛目鉢、瀬戸・美濃系陶器碗・鉢・水甕、京・信楽系陶器端反碗・小杉碗・急須・蓋・瓶・香炉類、施釉陶器碗、軟質施釉陶器上瓶類、丸・平瓦などが認められる。所属時期については、出土遺物から概ね19世紀中葉頃の所産と推定される。

SK112 出土遺物 (第25～27図参照)

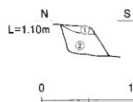
148・149は鉄釉、白色釉を重ねた施釉陶器碗で、平彩形を呈し湯高台をもつ。胎土・釉調から、富田・理兵衛焼との関連が推察される。150～153は京・信楽系陶器で、150は端反碗、152・153は小杉碗である。151は長く外反する口縁をもち、透明色の釉を施す。貫入が著しい。154・155は瀬戸・美濃系陶器で、碗蓋及び碗である。154は、呉須色の染付文様をもつ。155は広東碗で、呉須及び鉄絵を用いて外面の宝珠文を施文している。見込には、五弁花を描く。156～159は、磁器製の紅猪口である。156・158は関西系、あるいは瀬戸・美濃系、157・159は肥前系のものである。160は瀬戸・美濃系陶器で、ヒダ皿である。161は肥前系磁器で、蛇ノ目凹形高台をもつ輪花の染付皿である。162・163は、備前系陶器灯明皿である。164は施釉陶器火入である。鏡文をもち、鉄釉が施されている。165は鉄釉、白釉を重ねる陶器蓋で、



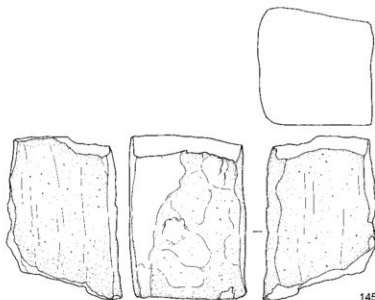
- ①2.5Y6/2灰黄色シルト質極細砂(やや締まる,
炭,焼土粒を若干含む)
②2.5Y4/1黄灰色シルト(炭,焼土粒を若干含む)



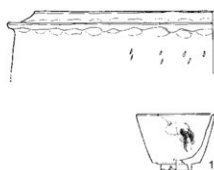
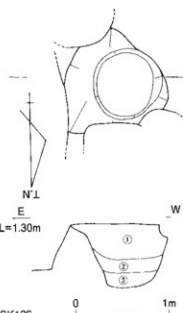
SK120



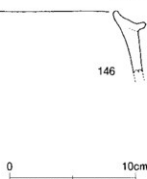
- ①2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土粒,瓦片
を含む)
②2.5Y6/1黄灰色シルト質極細砂(炭を若干含む)



SK122

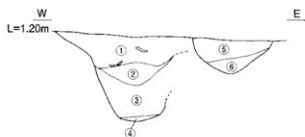
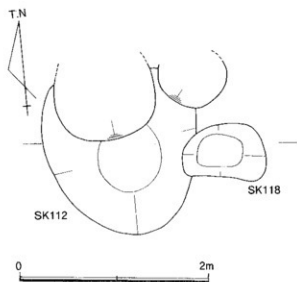


- ①5Y7/4淡黄色シルト質粘土(瓦片を含む)
②2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土(炭,焼土粒,淡黄色土塊を含む)
③5Y5/1灰色粗砂(締まる,円礫を含む)

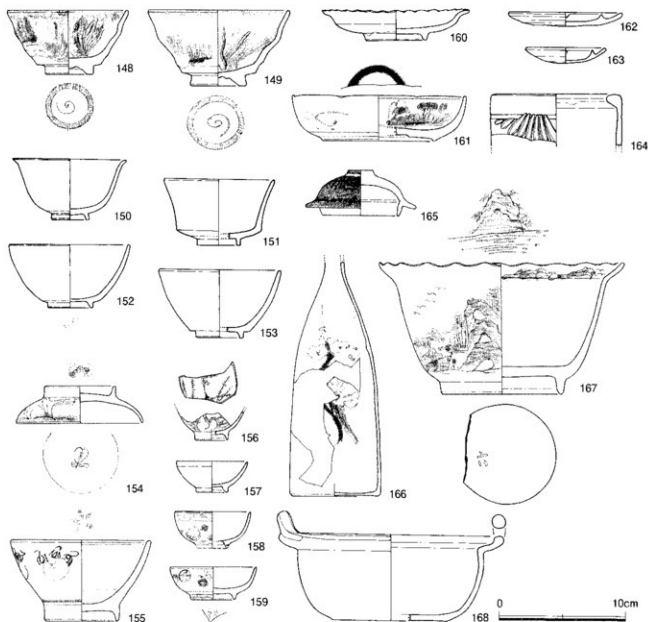


SK126

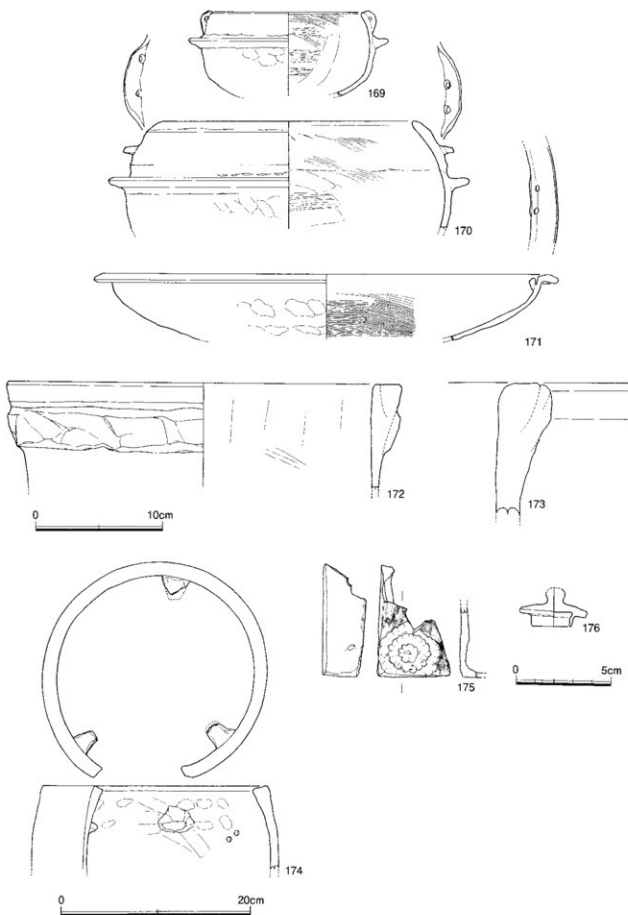
第24図 SK120・122・126 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3, 1/2)



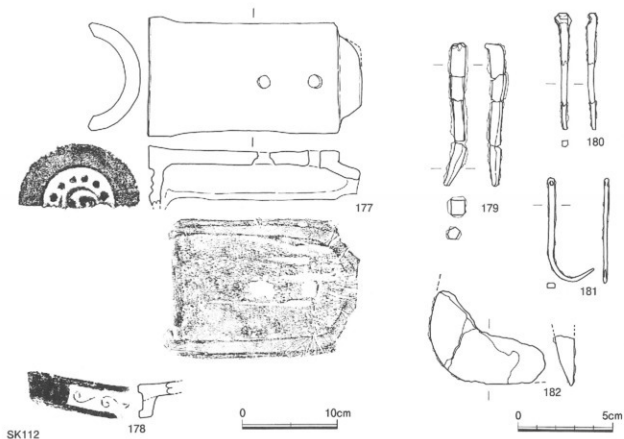
- ①2.5Y4/1黄灰色シルト(炭、焼土粒を若干含む、土壁、小円礫を含む)
- ②5Y7/3透黄色極細砂
- ③2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭を含む、土壁を多く含む)
- ④5Y5/1灰色砂質シルト(小円礫を含む、湧水層)
- ⑦~④:SK112埋土
- ⑤2.5Y4/1黄灰色シルト(炭を若干含む)
- ⑥2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭、焼土粒を若干含む)
- ⑤・⑥:SK118埋土



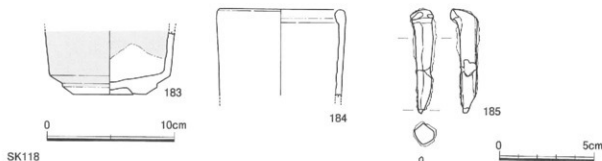
第25図 SK112・118 平・断面図 (1/40), SK112 出土遺物実測図 (1/3)



第 26 图 SK112 出土文物实测图 (1/3, 1/4, 1/2)



SK112



SK118

第27図 SK112・118出土遺物実測図(1/3, 1/4, 1/2)

胎土は暗赤褐色に焼き締まる。受け部には焙着痕が認められる。

166は京・信楽系陶器で、鉄絵を施した瓶である。167は肥前系磁器で、山水文の染付文様をもつ鉢である。焼継ぎ痕、金彩の傷隠しがみられ、高台内に「六」の焼継印が記されている。168は陶器鍋で、外面が煤化している。169・170は土師質土器羽釜、171は同焼焙である。172・173は土師質土器の甕類で、172は口縁部に貼付の突帯をもつ。173は、井側と考えられる大形品の口縁部である。174は土師質製の焼炉である。重複関係のあるSK113出土品と接合する。焚口は口縁上端から切り込み、口縁内側に3箇所、切欠きをもつ。外面は平滑だが、内面には指オサエ、ナデ調整が認められる。175は肥前系磁器の水滴である。176は軟質施釉陶器で、ミニチュア玩具である。177は2箇所、釘穴をもつ三巴文軒丸瓦で、凹面にはコビキ痕、刺子及び内叩き痕が残る。178は唐草文

軒平瓦である。179～182は金属製品で、179・180は鉄釘、181は釣針状の金具である。182は片刃のもので、刃器類と考えられる。

SK118(第25図参照)

調査地北部において確認した土坑である。検出高1.01m。平面は0.56～0.88mの楕円形を呈するもので、西端はSK112を切り込み開削されている。深度は0.37mを測り、断面はU字形を呈する。埋土は2層に細分できるが、概ね上・下層とは若干の炭、焼土粒を含むシルト質土で充填されている。出土遺物は少量で、図化したものの他、肥前系磁器碗、瀬戸・美濃系陶器腰鉋碗、京・信楽系陶器色絵碗がある。所属時期については、平面の重複関係でSK112に後出して検出されていることから、概ね19世紀中葉以降の所産と推定される。

SK118 出土遺物 (第 27 図参照)

183・184 は火入で、183 は肥前系磁器青磁、184 は京・信楽系のものである。183 の見込みには、砂粒の焙着痕が認められる。185 は鉄釘である。

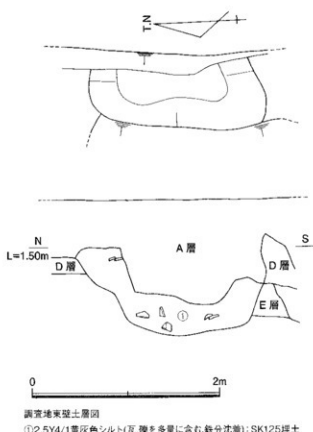
SK125 (第 28 図参照)

調査地中央部、東端において確認した土坑である。検出高 1.01 m、平面は南北方向に 1.85 m、東西方向では 0.56 m を測るが、調査範囲外になる東方向へと広がる。SX101 と隣接する西端は、不明瞭ながらこれに切られているものと判断した。深度は 0.46 m を測り、断面は北側で段が付くことが調査地東壁で確認できた。埋土は単層で、瓦礫を多量に含むシルト質土で充填されている。出土遺物はコンテナ 1/4 箱分あり、凶化したものの他、肥前

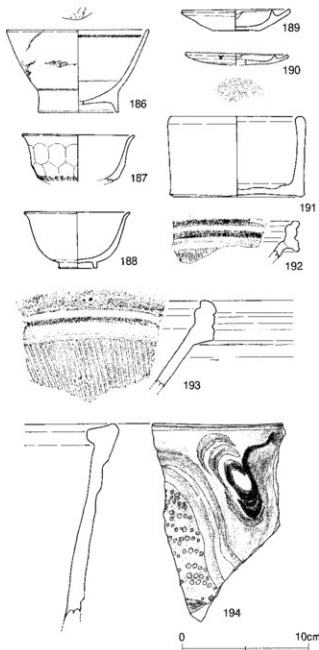
系磁器碗、瀬戸・美濃系磁器碗、瀬戸・美濃系陶器碗、京・信楽系陶器端反碗、施釉陶器甕、軟質施釉陶器鍋類、備前系陶器灯明皿、土師質土器甕類、瓦質土器羽釜等がある。所属時期については、出土遺物から概ね 19 世紀中葉以降の所産と推定される。

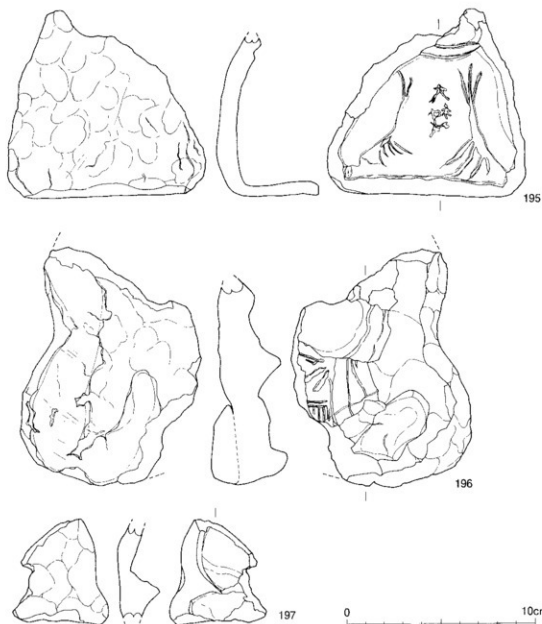
SK125 出土遺物 (第 28・29 図参照)

186 は肥前系磁器で、広東碗である。187 ～ 189 は、京・信楽系陶器である。187 は、亀甲と鋳を型押しした碗。188 は端反碗、189 は灯明皿である。190 ～ 193 は、備前系陶器である。190 は灯明皿。191 は(匣)鉢。192・193 は播鉢で、口縁部の形態が白神編年(白神 1992)のⅡ形式に該当し、堺・明石産と推定される。194 は瀬戸・美濃系陶器水甕である。195 は土型で、何れも土製人形類の外型である。195 は橙色を呈した精良な胎土



第 28 図 SK125 平・断面図 (1/40)、出土遺物実測図 (1/3)





第29図 SK125 出土遺物実測図 (1/2)

を用い、凹面は衣服の皺と「大和」の文字を刻み、キラコを塗布している。凸面には指オサエが顕著に残る。196は、鈍い橙色を呈し砂粒・金雲母を含んだ胎土を用いる。凹面にキラコの塗布、凸面に指オサエ、ケズリ調整が認められる。197は、やや粗い砂粒を含む灰白色の胎土を用いる。

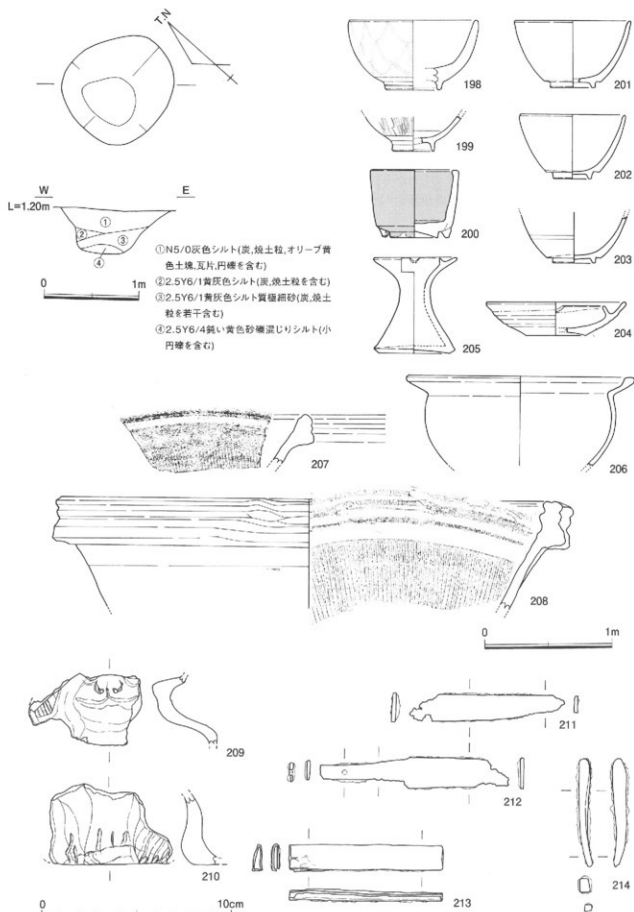
SK113 (第30図参照)

調査地北部において確認した土坑である。検出高1.12m、平面は1.1m前後の円形を呈し、北・南端でSK114とSK112を切り込んで開削されている。深度は0.61mを測り、断面は台形で中位に弱い段がみられる。埋土は4層に分層でき、上層にややグライ化した瓦や円礫、黄色土塊等を含んだシルトが厚く堆積し、中位に炭、焼土粒を含むシルト質土、最下層には砂礫混じりのシルト層が認められる。遺物は概ね中位までに存在し、コンテナ1/4箱

分が出土した。出土遺物には図化したものの他、肥前系磁器蓋、肥前系陶器刷毛月鉢、瀬戸・美濃系陶器植木鉢、京・信楽系陶器襖反碗、施釉陶器碗、軟質施釉陶器急須、土師質土器甕類等が認められる。所屬時期については、平面の重複関係でSK112に後出して検出されていることから、概ね19世紀中葉以降の所産と推定される。

SK113 出土遺物 (第30図参照)

198～200は肥前系磁器である。198は、波佐見産と推定される二重網目文の碗。199は小広東碗の底部。200は青磁香炉である。201～204は、京・信楽系陶器である。201～203は小杉碗。204は灯明皿である。205・206は施釉陶器で、205は灯明具、206は鍋で、何れも暗赤褐色に施釉される。207・208は備前系陶器瑠鉢で、各々口縁部等の特徴から、207が乗岡編年(乗岡2002)の近世2・3期に相当し、208については白神編年(白神1992)のⅡ形式に相当するもので堺・明石産と推定さ



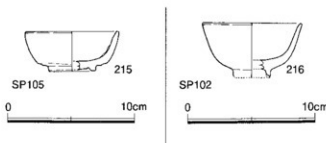
第30図 SK113 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3, 1/2)

れる。209・210は型成形された犬犬、あるいは獅子とみられる中空の土製品である。209は灰白色を呈した精良な胎土で、210の胎土は鈍い橙色を呈する。211～214は、金属製品である。211～213は小柄で、万部、柄が分割して出土したが、本来は同一品とみられる。214は鉄釘である。

第1遺構面ピット出土遺物(第31図参照)

第1遺構面では、13箇所ピットが検出された。土坑とともに密集して分布し、埋土についても同様に炭や焼土粒、黄色の粘土塊を含むシルト質土のものが多数を占める。深度は概ね0.3m前後となるものが多く、出土遺物も僅かであった。

215はSP105、216はSP102の出土遺物で、瀬戸・美濃系磁器の小碗である。



第31図 SP105・102出土遺物実測図(1/3)

SX101(第32図参照)

調査地中央部において確認した性格不明遺構である。検出高1.14m、平面は長軸で約3m、短軸で約2.5mを測る長方形を呈する。深度は0.91mを測り、断面は台形を呈する。埋土は10層に細分できたが、概ね3つにまとめられる。上位には炭、焼土粒、黄色土塊が混じる締まったシルト層が存在し、中位では瓦礫混じりのシルト質土となり、下位ではややグライ化し瓦礫を多量に含む砂質土の堆積が認められる。また底付近では、若干の湧水がみられた。瓦片を除けば、遺構の規模に比べて出土遺物は少なく、コンテナ1/2箱分となった。図化したものの他では、青花細片、肥前系磁器碗、同皿、同瓶、肥前系陶器鉢、瀬戸・美濃系陶器甕水入れ、京・信楽系陶器碗、施釉陶器鉢、備前系陶器插鉢、同灯明皿、土師質土器碗、丸平瓦の細片が認められる。所属時期については、これらの出土遺物から、概ね19世紀中葉頃の所産と推定される。

SX101出土遺物(第32図参照)

217は中国産白磁碗の口縁部、218は土師質土器杯の口縁部、219は弥生土器脚部、220は土師質土器足釜で、中世以前の所産であり混入遺物と考えられる。

221～223は、肥前系磁器の紅猪口である。224は京・

信楽系陶器色絵碗の底部で、高台内に紅とみられる赤色の付着物が認められる。225は京・信楽系陶器の灯明皿である。226は三巴文軒丸瓦の細片である。227は粘土塊で、粗いケズリ調整が認められる。

SX103(第33図参照)

調査地南西部において確認した性格不明遺構である。検出高は最高位で1.25mを測るが、SA101、SK101・105・106、SX101などが基盤としており、第1遺構面の下層部に相当する。東面を攪乱等により欠くが、平面は長軸で5.5m、短軸で2mの規模をもった長方形と推定される。深度は0.56mを測り、断面は台形状と推定される。埋土の堆積状況については、概ね上位に炭、焼土粒を含んだシルト層があり、中位以下は底部に至るまで炭、焼土を含んだ瓦礫混じりの堆積が認められる。出土遺物はコンテナ1箱分、図化したものの他では、肥前系磁器碗、肥前系陶器細片、備前系陶器瓶、土師質土器細片、丸平瓦片、牛馬の歯が認められる。所属時期については、これらの遺物から概ね17世紀後半以降の所産と推定される。

SX103出土遺物(第33図参照)

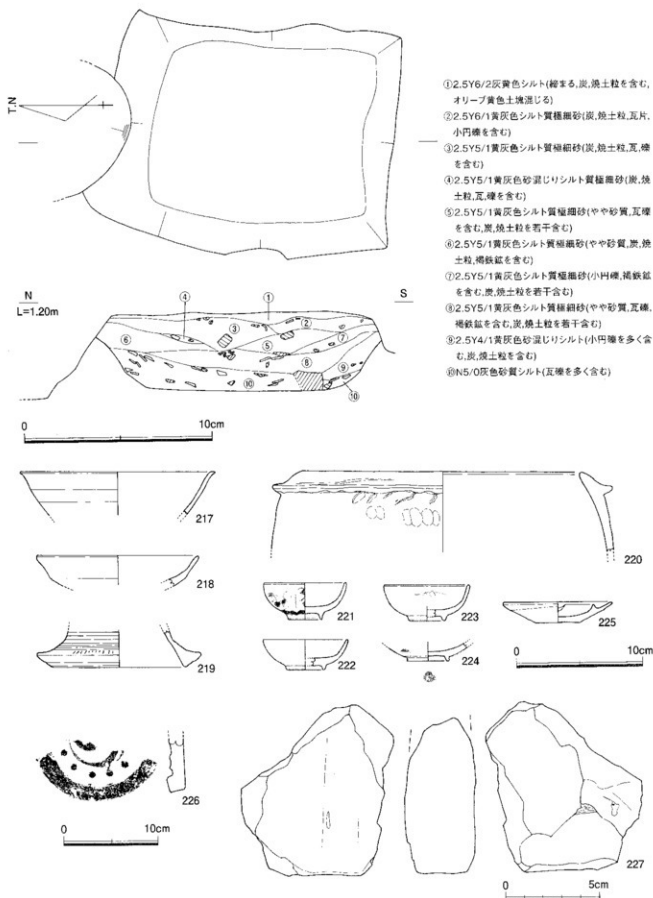
228は中国産白磁碗の口縁部である。229は肥前系陶器の口縁部である。230は備前系陶器甕の口縁部で、突帯をもつ。231・232は備前系陶器插鉢で、東岡編年(東岡2002)の近世1b～2期の所産と考えられる。233は肥前系陶器で、象嵌文様を施す三鳥戸の大口である。見込み及び肩付に砂目の焙色が認められる。大橋編年(大橋2000)では、Ⅱ・Ⅲ期の所産と考えられる。234は丸瓦の玉縁部である。235は鉄釘である。

SX102(第34図参照)

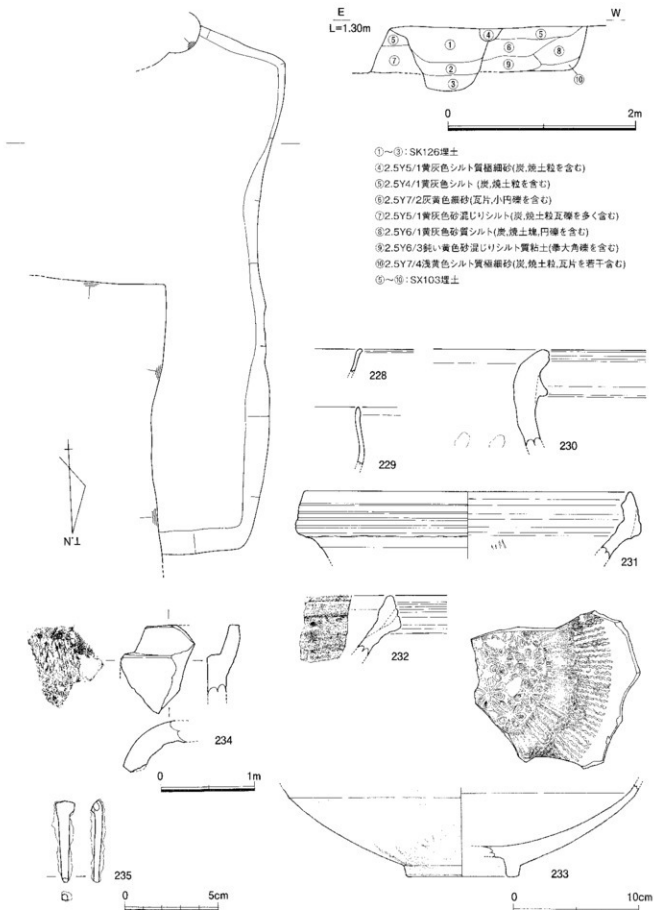
調査地南端において確認した性格不明遺構である。検出高1.22m、平面は南面を欠き北・東側については複数の遺構と重複し判然としない。深度は0.28mを測り、埋土は炭、焼土、黄色土塊、瓦礫を含むシルト質土の平層である。出土遺物はコンテナ1/4箱分、図化したものの他では、肥前系磁器皿、備前系陶器插鉢、軟質施釉陶器鍋、丸平瓦片、粘土塊が認められる。所属時期については、出土遺物から概ね19世紀中葉頃の所産と推定される。

SX102出土遺物(第34図参照)

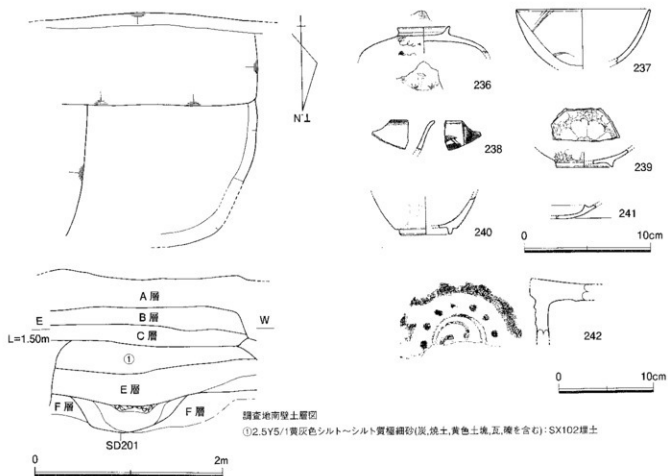
236は肥前系磁器で、染付文様の蓋である。237は肥前系磁器碗で、外面に上絵の痕跡が認められる。238は瀬戸・美濃系磁器の端反碗口縁部である。239は肥前系磁器で、水裂菊文花を染付けた碗底部である。240は京・信楽系陶器の小杉碗である。241は備前系陶器の灯明皿である。242は三巴文軒丸瓦の瓦当部である。



第32図 SX101 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)



第33図 SX103 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)



第34図 SX102 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

第4章 ま と め

第1節 中世以前について

中世以前における高松城跡の周辺の状況は、1995年以降、高松駅周辺の再開路に伴う発掘調査(乗松 2004、佐藤 2003、松本 2003a・b など)によってデータの蓄積が進んでいる。近年、これらの成果や本市の発掘調査成果に基づく考古学的研究と文献史学の研究成果(田中 1996、上野 2007a・b、渋谷 2007a・b、佐藤 2007)の総合化によって、地形復元や遺構変遷、中世港町としての「野原」やその景観が解明されつつあるとともに、古代以前の様相や近世との連続性(大嶋 2007・佐藤 2007b)なども明らかにされるなど、日を見張る成果を挙げている(上野・佐藤 2007、松本 2007a・b、大嶋 2007、市村 2007)。

今回の調査の第2遺構面において中世以前の遺構を確認することができたが、検出できた遺構に対して出土した遺物の量が非常に少ないため、時期を限定できる遺構は僅かである。そのため、本節では先の成果の比較を通じて、今回の調査成果についてまとめることとする。

【弥生時代後期後半】

確実な当該期の遺構はSK210とSP232のみであるが、その他の遺構(SB201、SD201、SK202、SK203、SK214)からも出土遺物に混入する形で弥生土器が出土している。近接するヨンデンビル建設に伴う調査(小川 2004)でも、弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構・遺物が確認されている。また、明確な遺構はないが、当該期の遺物が出土した東町奉行所の調査(小川 2005)、無量寿院跡の調査(中西 2005) などもある。

今回の調査でSK210とSP232が確認された範囲は、砂堆の中でもより高い箇所、砂堆の中でもあまり削平を受けていない範囲では、弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺構が確認できる可能性が想定される。既に指摘されているように、この周辺が砂堆の中でもより安定した土地であったと考えられ、今後の資料の蓄積が期待される場所である。また、西日本レベルで見した場合、砂堆に築かれた当該期の遺跡(港湾的集落)が他所でも確認されており、高松城跡周辺でも同様な性格の遺跡が確認される可能性も考えられる。

【古代】

古代以降と判断できた遺構はSK203とSP203のみである。周辺の調査では、ヨンデンビル建設に伴う調査(小川 2004)や丸の内地区の調査(松本 2003)で確認されているが、遺構・遺物とともに僅かである。丸の内地区の調査では、9～10世紀の遺物が出土した遺構は大きく削平されており、古代以前の遺構は、中世以降に削平されている場合も想定される。

【中世】

中世以降と判断できる遺構は、SB201、SD201・202、SK202・208・209・213・214、SP217・224・230・231・253・254である。その中でも時期を限定できる遺構は下記のとおり、大きく2つの時期に分けることができる。

①中世前半(13世紀後半～): SK202、SP 224・231

②中世末(16世紀後半～): SD201、SK213・214、SP254

遺構は非常に断片的であり、個々の時期の様相を復元することはできないが、これまでの周辺で行われた調査によって確認されている遺構・遺物の時期(12～13世紀、15～16世紀)と概ね一致している点は指摘できる。また、今回の調査で確認された溝SD201(N-13°-E)は、東町奉行所(小川 2005)や片原町遺跡(小川 2002)などで確認されたN-10°-Eに近い方位をもつ15～16世紀代の溝と同様な地割を示す溝と考えられ、大嶋氏(大嶋 2007)が指摘しているように16世紀段階には高松平野の条里地割(N-10°-E)がこの周辺まで延伸してきた状況を示していると考えられる。

【小結】

非常に断片的な資料のため、これまでの調査研究成果に新たな成果を加えるような点はないが、SD201などの成果は大嶋氏の見解を補強する資料と言えるであろう。今後、調査地周辺の道路拡幅にともなう発掘調査が予定されており、さらなる情報の収集と古代以前の様相などについての解明が待たれるところである。

第2節 近世以降について

調査地点と高松城の位置関係は、現在も残る太鼓櫓台(長櫓)がある桜の馬場跡の南東隅から引堀・堀端を挟み、そのほぼ対面側の武家地に相当している。

生駒時代の末期にあたる絵図『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』によれば、桜の馬場は武家屋敷となっており、太鼓櫓は対面所として記載されているが、その対面側となる外曲側の武家地には、三野四郎左衛門、その西隣には前野次太夫といった重臣の屋敷が認められる。屋敷を並べる両者であるが、生駒騒動においては対立関係にあり、三野四郎左衛門は藩主一族や在地出身の家臣からなる派閥に属し、前野次太夫は江戸藩邸や藝家家に近い家臣の派閥に属していた。

生駒家改易後、松平初期については、文献資料『生駒家廃乱記』によれば三野四郎左衛門の屋敷は太田兵衛、前野次太夫の屋敷は石井仁右衛門の屋敷となったことが記されており、石井仁右衛門については「高松藩士由緒録」によれば、水戸徳川家の祖であり、松平頼重の父である徳川頼房より仕える重臣で、高松入部時には

二千石を拝領している。太田兵衛については不明だが、この時期に比定されている「高松城下図屏風」では石井仁右衛門屋敷に相当する以上の屋敷構えをもって表現されており、これに相応する重臣であると推定される。

このように生駒末期～松平初期において、当地は有力家臣の屋敷地となっていたと考えられるが、当調査の結果においては、こうした屋敷の有様を示すものに乏しく、当該期に相当する可能性があるものとして SE102 が挙げられるのみである。

こうした状況については、以後の整地による影響を大きく受けたことが要因の一つとして考えられる。第1遺構面に属する大半の遺構が基盤とする17世紀後半以降の整地(D層)には、瓦礫を多く含むことが観察されており、屋敷地を改変した痕跡とも考えうる。享保3年(1718)の高松大火以降となる絵図『高松城下図』(享保年間 1718～1737)、『讃州高松絵図』(1757)では、先の2つの屋敷を合わせたと思われる広大な敷地となり、「御用屋敷」あるいは「前ヤシキ」と記されている。「御用屋敷」・「前ヤシキ」が示すものは不詳ではあるが、従来の拝領屋敷から大きく変更されたことが想定される。

この後、第1遺構面で確認された遺構の多くが該当する19世紀代になると、当地は絵図において「江戸長屋」と記される。『高松市街古図』(文化年間 1804～1818)では、堀端に面して長屋門と考えられる長大な建物が描かれており、明治15年に太鼓橋から外山輪に向けて撮影されたと考えられる写真(ケンブリッジ大学所蔵)においても海鼠塀をもった長屋門を見ることができる。またこの写真で見える限りでは、長屋門の内側になる敷地には、数棟のやや小さな建物が認められる。これ以外で「江戸長屋」の実態を示す資料は乏しいが、かつての地権者の記憶では市街地化が進む中、この一角は昭和の初期に至るまで写真に見られるような武家地の景観を良く留め、参勤交代に用いられた道具類等が保管されていたという。

調査範囲が一部に過ぎず、この敷地内の状況を明らかにできるものではないが、確認された遺構・遺物については、上述した当地の位置関係や第1遺構面の時期からこの「江戸長屋」に係る生活痕と考えられる。この内、出土遺物に認められる小柄や土型は当地の居住者像やその生業を端的に示すものとして挙げられ、武家が土製人形といった焼物の玩具製作に携った可能性が考えられる。高松城内で窯業に関わる確立例については、西の丸地区で明治27～30年にかけて松平時代の御用焼物師である理平(理兵衛)が香川県監獄所で行ったものが知られる。当地点の調査では窯業と判断できるものに乏しいが、所屬時期が幕末期に相当することから、武士階級の居住者が副業あるいは趣向の一環として土製品を製作していたことが想定される。

引用文献・主要参考文献

- ・市村高男 2007『中世讃岐の港町と瀬戸内海海運～近世都市高松を生み出した事件～』海に開かれた都市 高松・港港市 900年のあゆみ 香川県歴史博物館
- ・上野進 2007a『中世港町・野原の寺院～談義所・無量寿院の展開～』『シンポジウム 港町の原像』準備会会報 四国村落遺跡研究会事務局
- ・上野進 2007b『港町をめぐる寺社と領土』『港町の原像～中世港町・野原と讃岐の港町～』四国村落遺跡研究会
- ・上野進・佐藤竜馬 2007a『中世港町・野原について』『四国・その内と外』地方史研究協議会
- ・大嶋和則 2007『高松城跡の発掘成果から』『港町の原像～中世港町・野原と讃岐の港町～』四国村落遺跡研究会
- ・小川賢・片桐節子編 2004『高松城跡(松平入道家上屋敷跡)』新ヨシデンビル別館建設に伴う歴史文化財発掘調査報告 高松市教育委員会
- ・小野正敏 1982『15、16世紀の宋付碗、皿の分類とその年代』『貿易・陶磁研究 No. 2』日本貿易陶磁研究会
- ・大嶋和則 2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会 10周年記念』九州近世陶磁学会
- ・佐藤竜馬 1993『香川県十景山麓跡群における須恵器編年』『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』関西大学考古学研究室
- ・佐藤竜馬編 1995『国分寺・楠井遺跡』香川県教育委員会
- ・佐藤竜馬編 2000a『空海跡地遺跡群』香川県教育委員会
- ・佐藤竜馬 2000b『「西村型土器」の系譜』『香川県歴史文化財センター紀要』Ⅶ 香川県歴史文化財センター
- ・佐藤竜馬編 2002『高松城跡(西の丸地区)Ⅱ』香川県教育委員会
- ・佐藤竜馬編 2003『高松城跡(丸の内地区)Ⅱ』香川県教育委員会
- ・佐藤竜馬 2007a『さぬきの道者一門日記』から見た中世後半の野原』『シンポジウム 港町の原像』準備会会報 四国村落遺跡研究会事務局
- ・佐藤竜馬 2007b『初期高松城下町の在地的要素』『港町の原像～中世港町・野原と讃岐の港町～』四国村落遺跡研究会
- ・渋谷啓一 2007a『高松の位相 讃岐・瀬戸内・西日本』『シンポジウム 港町の原像』準備会会報 四国村落遺跡研究会事務局
- ・渋谷啓一 2007b『古・高松湾と瀬戸内海世界』『港町の原像～中世港町・野原と讃岐の港町～』四国村落遺跡研究会
- ・白神典之 1992『環濠跡』『東洋陶磁 第19号』
- ・田中健二・藤井洋一 1996『冠樹神社所蔵永禄八年「さぬきの道者一門日記」(写本)について』『香川大学教育学部研究報告 第1部』第97号 香川大学
- ・中西克也編 2005『高松城跡(無量寿院跡)』高松市教育委員会
- ・桑岡実 2002『岡山城一之曲輪跡・表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査』岡山市教育委員会
- ・桑岡実也 2004『14～15世紀の土師質土器群編年』『浜ノ町遺跡』香川県教育委員会
- ・松本和彦編 2003『高松城跡(丸の内地区)』香川県教育委員会
- ・松本和彦 2007a『中世野原の景観～前提としての地形復元～』『シンポジウム 港町の原像』準備会会報 四国村落遺跡研究会事務局
- ・松本和彦 2007b『野原の景観と地域構造～発掘調査成果を中心に～』『港町の原像～中世港町・野原と讃岐の港町～』四国村落遺跡研究会
- ・森村健一 2002『福建省漳州窯系陶磁器について』『大坂城跡発掘調査報告Ⅱ』(財)大阪府文化財センター
- ・山本信夫編 2000『大宰府系陶磁』XV～陶磁器分類編～太宰府市教育委員会
- ・横田賢次郎・森田龍 1978『白磁・青磁の分類』『九州歴史資料館研究論集4』

消構觀察表

各規定値は繰出時最大の値を指す

[illegible]

計画番号	計画名	計画期間	計画内容	計画の概要	計画の目的	計画の成果
SA101	SA101-1	2018.10.1～2019.3.31	SA101-1	SA101-1	SA101-1	SA101-1
SA102	SA102-1	2018.10.1～2019.3.31	SA102-1	SA102-1	SA102-1	SA102-1
SA103	SA103-1	2018.10.1～2019.3.31	SA103-1	SA103-1	SA103-1	SA103-1
SA104	SA104-1	2018.10.1～2019.3.31	SA104-1	SA104-1	SA104-1	SA104-1
SA105	SA105-1	2018.10.1～2019.3.31	SA105-1	SA105-1	SA105-1	SA105-1
SA106	SA106-1	2018.10.1～2019.3.31	SA106-1	SA106-1	SA106-1	SA106-1
SA107	SA107-1	2018.10.1～2019.3.31	SA107-1	SA107-1	SA107-1	SA107-1
SA108	SA108-1	2018.10.1～2019.3.31	SA108-1	SA108-1	SA108-1	SA108-1
SA109	SA109-1	2018.10.1～2019.3.31	SA109-1	SA109-1	SA109-1	SA109-1
SA110	SA110-1	2018.10.1～2019.3.31	SA110-1	SA110-1	SA110-1	SA110-1
SA111	SA111-1	2018.10.1～2019.3.31	SA111-1	SA111-1	SA111-1	SA111-1
SA112	SA112-1	2018.10.1～2019.3.31	SA112-1	SA112-1	SA112-1	SA112-1
SA113	SA113-1	2018.10.1～2019.3.31	SA113-1	SA113-1	SA113-1	SA113-1
SA114	SA114-1	2018.10.1～2019.3.31	SA114-1	SA114-1	SA114-1	SA114-1
SA115	SA115-1	2018.10.1～2019.3.31	SA115-1	SA115-1	SA115-1	SA115-1
SA116	SA116-1	2018.10.1～2019.3.31	SA116-1	SA116-1	SA116-1	SA116-1
SA117	SA117-1	2018.10.1～2019.3.31	SA117-1	SA117-1	SA117-1	SA117-1
SA118	SA118-1	2018.10.1～2019.3.31	SA118-1	SA118-1	SA118-1	SA118-1
SA119	SA119-1	2018.10.1～2019.3.31	SA119-1	SA119-1	SA119-1	SA119-1
SA120	SA120-1	2018.10.1～2019.3.31	SA120-1	SA120-1	SA120-1	SA120-1
SA121	SA121-1	2018.10.1～2019.3.31	SA121-1	SA121-1	SA121-1	SA121-1
SA122	SA122-1	2018.10.1～2019.3.31	SA122-1	SA122-1	SA122-1	SA122-1
SA123	SA123-1	2018.10.1～2019.3.31	SA123-1	SA123-1	SA123-1	SA123-1
SA124	SA124-1	2018.10.1～2019.3.31	SA124-1	SA124-1	SA124-1	SA124-1
SA125	SA125-1	2018.10.1～2019.3.31	SA125-1	SA125-1	SA125-1	SA125-1
SA126	SA126-1	2018.10.1～2019.3.31	SA126-1	SA126-1	SA126-1	SA126-1
SA127	SA127-1	2018.10.1～2019.3.31	SA127-1	SA127-1	SA127-1	SA127-1
SA128	SA128-1	2018.10.1～2019.3.31	SA128-1	SA128-1	SA128-1	SA128-1
SA129	SA129-1	2018.10.1～2019.3.31	SA129-1	SA129-1	SA129-1	SA129-1
SA130	SA130-1	2018.10.1～2019.3.31	SA130-1	SA130-1	SA130-1	SA130-1
SA131	SA131-1	2018.10.1～2019.3.31	SA131-1	SA131-1	SA131-1	SA131-1
SA132	SA132-1	2018.10.1～2019.3.31	SA132-1	SA132-1	SA132-1	SA132-1
SA133	SA133-1	2018.10.1～2019.3.31	SA133-1	SA133-1	SA133-1	SA133-1
SA134	SA134-1	2018.10.1～2019.3.31	SA134-1	SA134-1	SA134-1	SA134-1
SA135	SA135-1	2018.10.1～2019.3.31	SA135-1	SA135-1	SA135-1	SA135-1
SA136	SA136-1	2018.10.1～2019.3.31	SA136-1	SA136-1	SA136-1	SA136-1
SA137	SA137-1	2018.10.1～2019.3.31	SA137-1	SA137-1	SA137-1	SA137-1
SA138	SA138-1	2018.10.1～2019.3.31	SA138-1	SA138-1	SA138-1	SA138-1
SA139	SA139-1	2018.10.1～2019.3.31	SA139-1	SA139-1	SA139-1	SA139-1
SA140	SA140-1	2018.10.1～2019.3.31	SA140-1	SA140-1	SA140-1	SA140-1
SA141	SA141-1	2018.10.1～2019.3.31	SA141-1	SA141-1	SA141-1	SA141-1
SA142	SA142-1	2018.10.1～2019.3.31	SA142-1	SA142-1	SA142-1	SA142-1
SA143	SA143-1	2018.10.1～2019.3.31	SA143-1	SA143-1	SA14	

[illegible]

出土遺物觀察表

①内の数値は現存額を示す

[illegible]

[illegible]

[illegible]

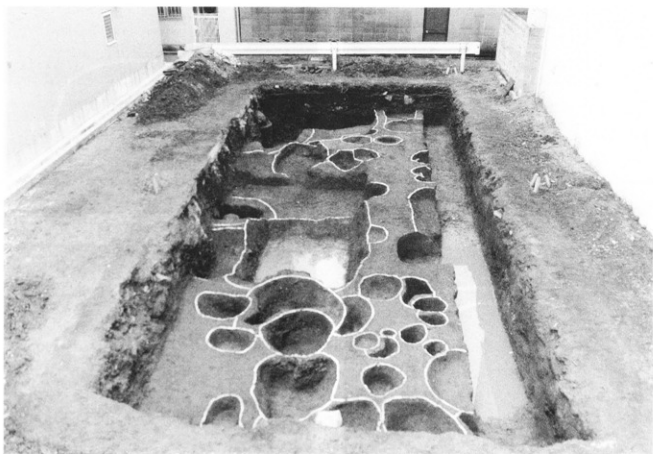
[illegible]

形式 番号	技術仕様	国産	材料名	用途	位置 (m)	長さ (m)	幅 (m)	敷上	色調1 (色1)	色調2 (色2)	色調3 (色3)	色調4 (色4)	色調5 (色5)	色調6 (色6)	色調7 (色7)	色調8 (色8)	色調9 (色9)	色調10 (色10)	色調11 (色11)	色調12 (色12)	色調13 (色13)	色調14 (色14)	色調15 (色15)	色調16 (色16)	色調17 (色17)	色調18 (色18)	色調19 (色19)	色調20 (色20)	色調21 (色21)	色調22 (色22)	色調23 (色23)	色調24 (色24)	色調25 (色25)	色調26 (色26)	色調27 (色27)	色調28 (色28)	色調29 (色29)	色調30 (色30)	色調31 (色31)	色調32 (色32)	色調33 (色33)	色調34 (色34)	色調35 (色35)	色調36 (色36)	色調37 (色37)	色調38 (色38)	色調39 (色39)	色調40 (色40)	色調41 (色41)	色調42 (色42)	色調43 (色43)	色調44 (色44)	色調45 (色45)	色調46 (色46)	色調47 (色47)	色調48 (色48)	色調49 (色49)	色調50 (色50)	色調51 (色51)	色調52 (色52)	色調53 (色53)	色調54 (色54)	色調55 (色55)	色調56 (色56)	色調57 (色57)	色調58 (色58)	色調59 (色59)	色調60 (色60)	色調61 (色61)	色調62 (色62)	色調63 (色63)	色調64 (色64)	色調65 (色65)	色調66 (色66)	色調67 (色67)	色調68 (色68)	色調69 (色69)	色調70 (色70)	色調71 (色71)	色調72 (色72)	色調73 (色73)	色調74 (色74)	色調75 (色75)	色調76 (色76)	色調77 (色77)	色調78 (色78)	色調79 (色79)	色調80 (色80)	色調81 (色81)	色調82 (色82)	色調83 (色83)	色調84 (色84)	色調85 (色85)	色調86 (色86)	色調87 (色87)	色調88 (色88)	色調89 (色89)	色調90 (色90)	色調91 (色91)	色調92 (色92)	色調93 (色93)	色調94 (色94)	色調95 (色95)	色調96 (色96)	色調97 (色97)	色調98 (色98)	色調99 (色99)	色調100 (色100)	色調101 (色101)	色調102 (色102)	色調103 (色103)	色調104 (色104)	色調105 (色105)	色調106 (色106)	色調107 (色107)	色調108 (色108)	色調109 (色109)	色調110 (色110)	色調111 (色111)	色調112 (色112)	色調113 (色113)	色調114 (色114)	色調115 (色115)	色調116 (色116)	色調117 (色117)	色調118 (色118)	色調119 (色119)	色調120 (色120)	色調121 (色121)	色調122 (色122)	色調123 (色123)	色調124 (色124)	色調125 (色125)	色調126 (色126)	色調127 (色127)	色調128 (色128)	色調129 (色129)	色調130 (色130)	色調131 (色131)	色調132 (色132)	色調133 (色133)	色調134 (色134)	色調135 (色135)	色調136 (色136)	色調137 (色137)	色調138 (色138)	色調139 (色139)	色調140 (色140)	色調141 (色141)	色調142 (色142)	色調143 (色143)	色調144 (色144)	色調145 (色145)	色調146 (色146)	色調147 (色147)	色調148 (色148)	色調149 (色149)	色調150 (色150)	色調151 (色151)	色調152 (色152)	色調153 (色153)	色調154 (色154)	色調155 (色155)	色調156 (色156)	色調157 (色157)	色調158 (色158)	色調159 (色159)	色調160 (色160)	色調161 (色161)	色調162 (色162)	色調163 (色163)	色調164 (色164)	色調165 (色165)	色調166 (色166)	色調167 (色167)	色調168 (色168)	色調169 (色169)	色調170 (色170)	色調171 (色171)	色調172 (色172)	色調173 (色173)	色調174 (色174)	色調175 (色175)	色調176 (色176)	色調177 (色177)	色調178 (色178)	色調179 (色179)	色調180 (色180)	色調181 (色181)	色調182 (色182)	色調183 (色183)	色調184 (色184)	色調185 (色185)	色調186 (色186)	色調187 (色187)	色調188 (色188)	色調189 (色189)	色調190 (色190)	色調191 (色191)	色調192 (色192)	色調193 (色193)	色調194 (色194)	色調195 (色195)	色調196 (色196)	色調197 (色197)	色調198 (色198)	色調199 (色199)	色調200 (色200)	色調201 (色201)	色調202 (色202)	色調203 (色203)	色調204 (色204)	色調205 (色205)	色調206 (色206)	色調207 (色207)	色調208 (色208)	色調209 (色209)	色調210 (色210)	色調211 (色211)	色調212 (色212)	色調213 (色213)	色調214 (色214)	色調215 (色215)	色調216 (色216)	色調217 (色217)	色調218 (色218)	色調219 (色219)	色調220 (色220)	色調221 (色221)	色調222 (色222)	色調223 (色223)	色調224 (色224)	色調225 (色225)	色調226 (色226)	色調227 (色227)	色調228 (色228)	色調229 (色229)	色調230 (色230)	色調231 (色231)	色調232 (色232)	色調233 (色233)	色調234 (色234)	色調235 (色235)	色調236 (色236)	色調237 (色237)	色調238 (色238)	色調239 (色239)	色調240 (色240)	色調241 (色241)	色調242 (色242)	色調243 (色243)	色調244 (色244)	色調245 (色245)	色調246 (色246)	色調247 (色247)	色調248 (色248)	色調249 (色249)	色調250 (色250)	色調251 (色251)	色調252 (色252)	色調253 (色253)	色調254 (色254)	色調255 (色255)	色調256 (色256)	色調257 (色257)	色調258 (色258)	色調259 (色259)	色調260 (色260)	色調261 (色261)	色調262 (色262)	色調263 (色263)	色調264 (色264)	色調265 (色265)	色調266 (色266)	色調267 (色267)	色調268 (色268)	色調269 (色269)	色調270 (色270)	色調271 (色271)	色調272 (色272)	色調273 (色273)	色調274 (色274)	色調275 (色275)	色調276 (色276)	色調277 (色277)	色調278 (色278)	色調279 (色279)	色調280 (色280)	色調281 (色281)	色調282 (色282)	色調283 (色283)	色調284 (色284)	色調285 (色285)	色調286 (色286)	色調287 (色287)	色調288 (色288)	色調289 (色289)	色調290 (色290)	色調291 (色291)	色調292 (色292)	色調293 (色293)	色調294 (色294)	色調295 (色295)	色調296 (色296)	色調297 (色297)	色調298 (色298)	色調299 (色299)	色調300 (色300)	色調301 (色301)	色調302 (色302)	色調303 (色303)	色調304 (色304)	色調305 (色305)	色調306 (色306)	色調307 (色307)	色調308 (色308)	色調309 (色309)	色調310 (色310)	色調311 (色311)	色調312 (色312)	色調313 (色313)	色調314 (色314)	色調315 (色315)	色調316 (色316)	色調317 (色317)	色調318 (色318)	色調319 (色319)	色調320 (色320)	色調321 (色321)	色調322 (色322)	色調323 (色323)	色調324 (色324)	色調325 (色325)	色調326 (色326)	色調327 (色327)	色調328 (色328)	色調329 (色329)	色調330 (色330)	色調331 (色331)	色調332 (色332)	色調333 (色333)	色調334 (色334)	色調335 (色335)	色調336 (色336)	色調337 (色337)	色調338 (色338)	色調339 (色339)	色調340 (色340)	色調341 (色341)	色調342 (色342)	色調343 (色343)	色調344 (色344)	色調345 (色345)	色調346 (色346)	色調347 (色347)	色調348 (色348)	色調349 (色349)	色調350 (色350)	色調351 (色351)	色調352 (色352)	色調353 (色353)	色調354 (色354)	色調355 (色355)	色調356 (色356)	色調357 (色357)	色調358 (色358)	色調359 (色359)	色調360 (色360)	色調361 (色361)	色調362 (色362)	色調363 (色363)	色調364 (色364)	色調365 (色365)	色調366 (色366)	色調367 (色367)	色調368 (色368)	色調369 (色369)	色調370 (色370)	色調371 (色371)	色調372 (色372)	色調373 (色373)	色調374 (色374)	色調375 (色375)	色調376 (色376)	色調377 (色377)	色調378 (色378)	色調379 (色379)	色調380 (色380)	色調381 (色381)	色調382 (色382)	色調383 (色383)	色調384 (色384)	色調385 (色385)	色調386 (色386)	色調387 (色387)	色調388 (色388)	色調389 (色389)	色調390 (色390)	色調391 (色391)	色調392 (色392)	色調393 (色393)	色調394 (色394)	色調395 (色395)	色調396 (色396)	色調397 (色397)	色調398 (色398)	色調399 (色399)	色調400 (色400)	色調401 (色401)	色調402 (色402)	色調403 (色403)	色調404 (色404)	色調405 (色405)	色調406 (色406)	色調407 (色407)	色調408 (色408)	色調409 (色409)	色調410 (色410)	色調411 (色411)	色調412 (色412)	色調413 (色413)	色調414 (色414)	色調415 (色415)	色調416 (色416)	色調417 (色417)	色調418 (色418)	色調419 (色419)	色調420 (色420)	色調421 (色421)	色調422 (色422)	色調423 (色423)	色調424 (色424)	色調425 (色425)	色調426 (色426)	色調427 (色427)	色調428 (色428)	色調429 (色429)	色調430 (色430)	色調431 (色431)	色調432 (色432)	色調433 (色433)	色調434 (色434)	色調435 (色435)	色調436 (色436)	色調437 (色437)	色調438 (色438)	色調439 (色439)	色調440 (色440)	色調441 (色441)	色調442 (色442)	色調443 (色443)	色調444 (色444)	色調445 (色445)	色調446 (色446)	色調447 (色447)	色調448 (色448)	色調449 (色449)	色調450 (色450)	色調451 (色451)	色調452 (色452)	色調453 (色453)	色調454 (色454)	色調455 (色455)	色調456 (色456)	色調457 (色457)	色調458 (色458)	色調459 (色459)	色
----------	------	----	-----	----	-----------	-----------	----------	----	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	---

製品 番号	品上通称	種類	品名	電圧	寸法 (mm)		電圧	電圧1 (mm)	色別 (種類、内外色別)	色別1 (4色、上白)	形状	備考
					幅	高さ						
221	SA-01	紙製	紙製品	電圧	6.7	2.4	2.2	紙	紙(1/16)	透明色		電圧に適合する
222	SA-02	紙製	紙製品	電圧	6.4	2.9	2.2	紙	紙(1/16)	透明色		
224	SA-03	紙製	紙製品	電圧	1.4	3.4	紙	紙(1/16)	紙(2.5/1/2)	白色		電圧に適合する
225	SA-04	紙製	紙製品	電圧	0.5	1.7	3.2	紙	紙(1/16)	紙(2.5/1/2)		電圧に適合する
226	SA-05	紙製	紙製品	電圧	0.5	1.7	3.2	紙	紙(1/16)	紙(2.5/1/2)		電圧に適合する
227	SA-06	紙製	紙製品	電圧	0.5	1.7	3.2	紙	紙(1/16)	紙(2.5/1/2)		電圧に適合する
228	SA-07	紙製	紙製品	電圧	0.5	1.7	3.2	紙	紙(1/16)	紙(2.5/1/2)		電圧に適合する
229	SA-08	紙製	紙製品	電圧	0.5	1.7	3.2	紙	紙(1/16)	紙(2.5/1/2)		電圧に適合する
230	SA-09	紙製	紙製品	電圧	0.5	1.7	3.2	紙	紙(1/16)	紙(2.5/1/2)		電圧に適合する
231	SA-10	紙製	紙製品	電圧	0.5	1.7	3.2	紙	紙(1/16)	紙(2.5/1/2)		電圧に適合する
232	SA-11	紙製	紙製品	電圧	0.5	1.7	3.2	紙	紙(1/16)	紙(2.5/1/2)		電圧に適合する
233	SA-12	紙製	紙製品	電圧	0.5	1.7	3.2	紙	紙(1/16)	紙(2.5/1/2)		電圧に適合する
234	SA-13	紙製	紙製品	電圧	0.5	1.7	3.2	紙	紙(1/16)	紙(2.5/1/2)		電圧に適合する
235	SA-14	紙製	紙製品	電圧	0.5	1.7	3.2	紙	紙(1/16)	紙(2.5/1/2)		電圧に適合する
236	SA-15	紙製	紙製品	電圧	0.5	1.7	3.2	紙	紙(1/16)	紙(2.5/1/2)		電圧に適合する
237	SA-16	紙製	紙製品	電圧	0.5	1.7	3.2	紙	紙(1/16)	紙(2.5/1/2)		電圧に適合する
238	SA-17	紙製	紙製品	電圧	0.5	1.7	3.2	紙	紙(1/16)	紙(2.5/1/2)		電圧に適合する
239	SA-18	紙製	紙製品	電圧	0.5	1.7	3.2	紙	紙(1/16)	紙(2.5/1/2)		電圧に適合する
240	SA-19	紙製	紙製品	電圧	0.5	1.7	3.2	紙	紙(1/16)	紙(2.5/1/2)		電圧に適合する
241	SA-20	紙製	紙製品	電圧	0.5	1.7	3.2	紙	紙(1/16)	紙(2.5/1/2)		電圧に適合する
242	SA-21	紙製	紙製品	電圧	0.5	1.7	3.2	紙	紙(1/16)	紙(2.5/1/2)		電圧に適合する



1 第2遺構面全景（南から）



2 第1遺構面全景（北から）



1 調査地西壁土層 (南東から)



2 調査地南壁土層 (北から)



3 調査地北壁土層 (南から)



4 SX101 断面



5 SA101 P-2 (東から)



6 SA101 P-3 (東から)



7 SA101 P-4 (東から)



8 SA101 P-5 (東から)

1 第2遺構面（北から）



2 第2遺構面北西部
上層遺構（北西から）



3 第2遺構面北西部
下層遺構（南西から）





1 SD201 (南から)



2 SD201 (北から)



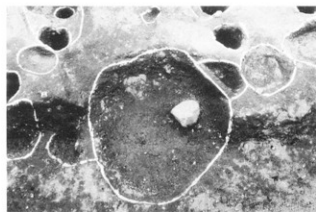
3 SD201 断面



4 SB201 (南から)



5 SK204 断面



6 SK213 (西から)



7 SK213 遺物出土状況

1 第1遺構面北部
(南西から)



2 第1遺構面南部
(西から)



3 SX101・SE102
・SK125 (西から)





1 第1 遺構面 (南から)



2 SA101 (北から)



3 SE101 (西から)



4 SE102 (東から)



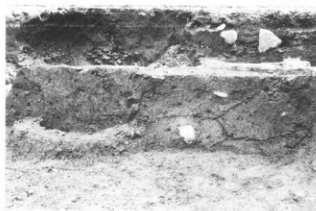
5 SK112・113 (西から)



6 SK114・115 (南西から)



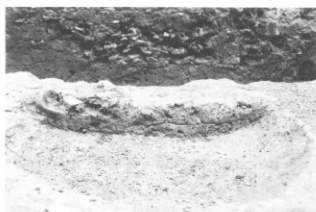
1 SX103 (南東から)



2 SX103 断面



3 SK125 (西から)



4 SK102 断面



5 SK104 断面



6 SK105 断面



7 SK106 断面



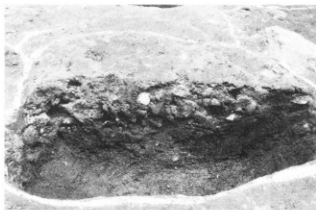
8 SK108 断面



1 SK112 断面



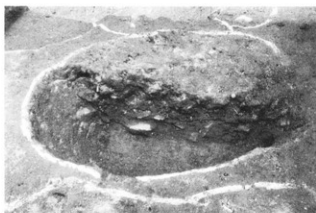
2 SK113 断面



3 SK114 断面



4 SK115 断面



5 SK116 断面



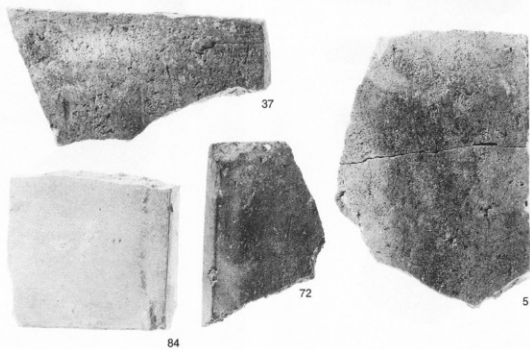
6 SK118 断面



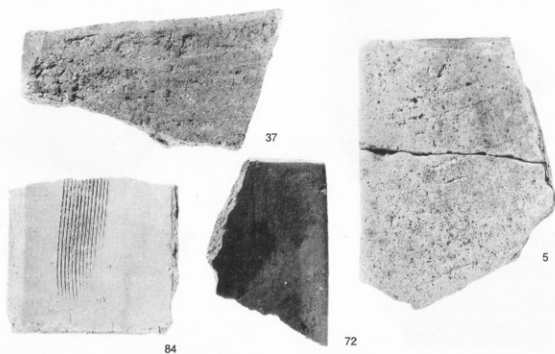
7 SK119 断面



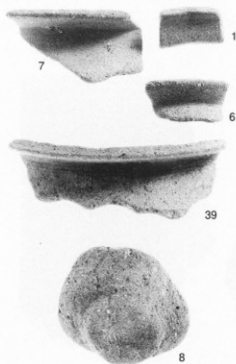
8 SK122 断面



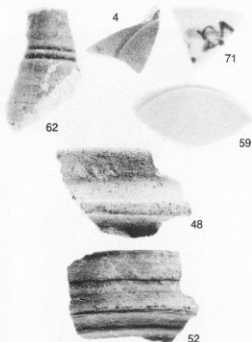
1 第2 遺構面出土平瓦（凸面）



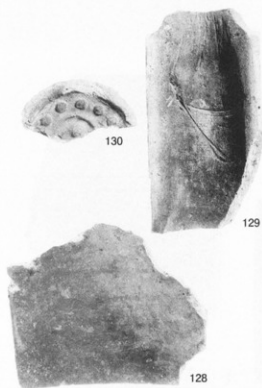
2 第2 遺構面出土平瓦（凹面）



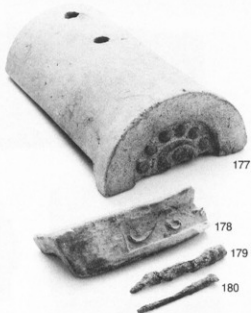
1 第2遺構面出土弥生土器



2 第2遺構面出土土器・陶磁器



3 SK104 出土瓦



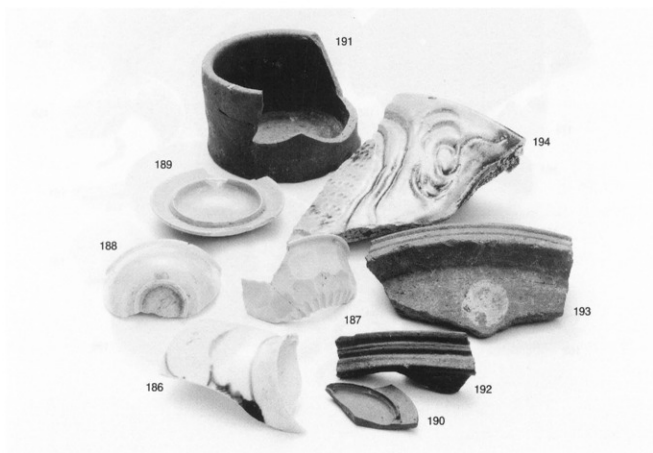
4 SK112 出土瓦・鉄釘



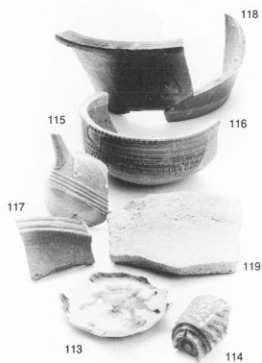
SK112 出土土器・陶磁器



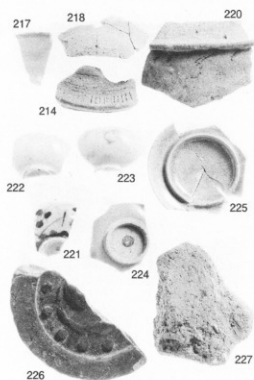
1 SK113 出土土器・陶磁器・鉄釘



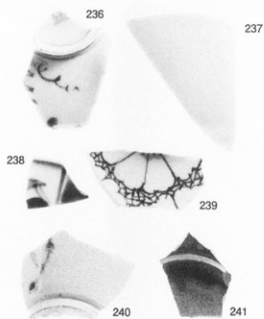
2 SK125 出土陶磁器



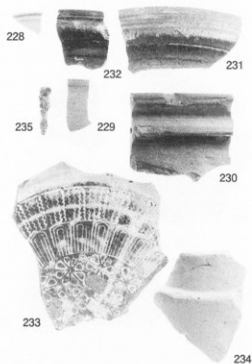
1 SK101 出土土器・陶磁器



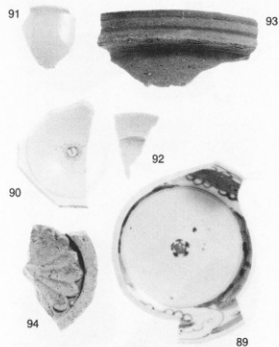
2 SX101 出土遺物



3 SX102 出土陶磁器



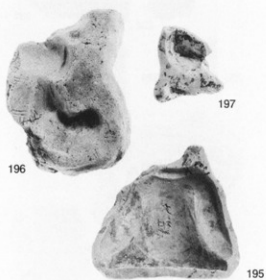
4 SX103 出土遺物



1 SE102 検出時出土遺物



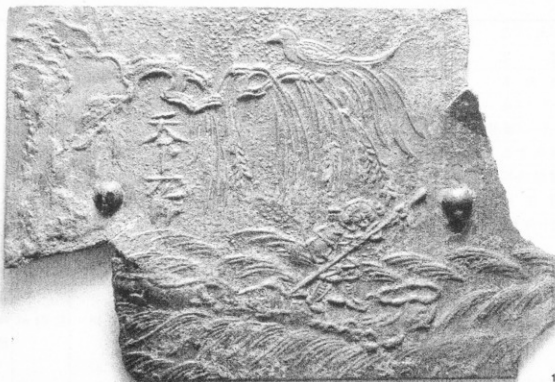
2 SE101 出土墨書・刻書土器



3 SK125 出土土型



4 SK210 出土土錘



112

1 SE101 出土鏡



2 SK113 出土小柄



3 SK112 出土金属製品 1



4 SK112 出土金属製品 2

報告書抄録

ふりがな	たかまつじょうあと(えどながやあとⅠ)								
書 名	高松城跡(江戸長屋跡Ⅰ)								
副 書 名	高松海岸線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1冊								
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告								
シリーズ番号	第115集								
編集者名	小川 賢, 渡邊 誠								
編集機関	高松市教育委員会								
所 在 地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL 087(839)2660								
発行年月日	平成20年3月31日								
ふりがな	ふりがな	コ ー ド						調 査 面 積	調 査 原 因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号						
たかまつじょうあと 高松城跡 えどながやあと (江戸長屋跡Ⅰ)	たかまつし 高松市 まるの内	37201		34° 20′ 53″	134° 3′ 6″	H19.6.18 ～ H19.7.31		約 84 m ²	高松海 岸線街 路事業
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
高松城跡 (江戸長屋跡Ⅰ)	城 館	戦国時代	掘立柱建物, 区画溝		中国産青・白磁土師質土器				
		江戸時代	櫓列, 井戸, 土坑等		国産陶磁器, 土師質土器類, 近世瓦, 金属製品				
要約	掘立柱建物や区画溝をもつ中世末期の集落跡を確認したほか, 近世以降においては, 高松城外曲輪にあった往時の江戸長屋に関わる遺構・遺物が主体となって認められた。								

高松城跡(江戸長屋跡Ⅰ)

編集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号

発行 高松市教育委員会

発行日 平成20年3月31日

印刷 有限会社 中央ファイリング